設

389
56

X 複写

地獄變

他六篇

イ川龍之介作

389-56

地獄變

他六篇

芥川龍之介作

大正
10 10.25
内交

Vest-pocket Series
of
Masterpieces,

目次

地獄變
きりしとほろ上人傳
枯野抄
龍
首が落ちた話
密柑と沼地

ヴエスドポケツト傑作叢書
第四篇
東京春陽堂版

地獄變

一

堀川の大殿樣のやうな方は、これまでは固より、後の世には恐らく二人とはいらつしやいますまい。噂に聞きますと、あの方の御誕生になる前には、大威德明王の御姿が御母君の夢枕にお立ちになつたとか申す事でございますが、兎に角御生れつきから、並々の人間とは御違ひになつてゐたやうでございます。でございますから、あの方の爲さいました事には、一つとして私どもの意表に出てゐないものはございません。早い話が堀川のお邸の御規模を拜見致しましても、壯大と申しませうか、豪放と申しませうか、到底私どもの凡慮には及ばない、思ひ切つた所があるやうで

ございます。中にはまた、そこを色々とあげつらつて大殿樣の御性行を始皇帝や陽帝に比べるものもございますが、それは諺に云ふ群盲の象を撫でるやうなものでもございませうか。あの方の御思召は、決してそのやうに御自分ばかり、榮耀榮華をなさらうと申すのではございません。それよりはもつと下々の事まで御考へになる、云はば天下と共に樂しむとでも申しさうな、大腹中の御器量がございました。

それでございますから、二條大宮の百鬼夜行に御遇ひになつても、各別御障りがなかつたのでございませう。又陸奥の鹽竈の景色を寫したので名高いあの東三條の河原院に、夜な〳〵現はれると云ふ噂のあつた融の左大臣の靈でさへ、大殿樣のお叱りを受けては、姿を消したのに相違ございますまい。かやうな御威光でございますから、その頃洛中の老若男女が、大殿樣と申しますと、まるで權者の再來のやうに尊み合ひましたも、決して無理ではございません。何時ぞや、內の梅花の宴からの御歸りに御車の牛が放れて、折から通りかゝた老人に輕我をさせました時でさへ、

その老人は手を合せて、大殿樣の牛にかけられた事を難有がつたと申す事でございます。

さやうな次第でございますから、大殿樣御一代の間には、後々までも語り草になりますやうな事が、隨分澤山にございました。大饗の引出物に白馬ばかりを三十頭、賜つたこともございますし、長良の橋の橋柱に御寵愛の童を立てた事もございますし、それから又華陀の術を傳へた震旦の僧に、御腿の瘡を御切らせになつた事もございますし、――一々數へ立てゝ居りましては、とても際限がございません。が、その數多い御逸事の中でも、今では御家の重寶になつて居ります地獄變の屏風の由來程、恐ろしい話はございますまい。日頃は物に御騒ぎにならない大殿樣でさへ、あの時ばかりは、流石に御驚きになつたやうでございました。まして御側に仕へてゐた私どもが、魂も消えるばかりに思つたのは、申し上げるまでもございません。

4 中でも私なぞは、大殿樣にも二十年來御奉公申して居りましたが、それでさへ、あ

5 のやうな凄じい見物に出遇つた事は、ついぞ又となかつた位でございます。

しかし、その御話を致しますには、豫め先づ、あの地獄變の屏風を描きました、良秀と申す畫師の事を申し上げて置く必要がございませう。

二

良秀と申しましたら、或は唯今でも猶、あの方の事を覺えていらつしやる方がございませう。その頃繪筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な繪師でございます。あの時の事がございました時には、彼是もう五十の阪に、手がとゞいて居りましたらうか。見た所は唯、脊の低い、骨と皮ばかりに痩せた、意地の惡さうな老人でございました。それが大殿樣の御邸へ參りまする時には、よく丁字染の狩衣に揉烏帽子をかけて居りましたが、人がらは至つて卑しい方で、何故か年よりらしくもなく、脣の目立つて赤いのが、その上に又氣味の

悪い、如何にも獣めいた心もちを起させたものでございます。中にはあれは畫筆を舐めるので紅がつくのだと〻申した人も居りましたが、どう云ふものでございませうか。尤もそれより口の悪い誰彼は、良秀の立居振舞が猿のやうだとか申しまして、猿秀と云ふ諢名までつけた事がございました。

いや猿秀と申せば、かやうな御話もございます。その頃大殿様の御邸には、十五になる良秀の一人娘が、小女房に上つて居りましたが、これは又生みの親には似もつかない、愛嬌のある娘でございました。その上早く女親に別れましたせゐか、思ひやりの深い、年よりはませた、悧巧な生れつきで、年の若いのにも似ず、何かとよく氣がつくものでございますから、御臺様を始め外の女房たちにも、可愛がられて居たやうでございます。

すると何かの折に、丹波の國から人馴れた猿を一匹、献上したものがございまして、それに丁度悪戯盛りの若殿様が、良秀と云ふ名を御つけになりました。唯でさ

へその猿の容子が可笑しい所へ、かやうな名がついたのでございますから、御邸中誰一人笑はないものはございません。それも笑ふばかりならよろしうございますが、面白半分に皆のものが、やれ御庭の松に上つたの、やれ曹司の疊をよごしたのと、その度毎に、良秀々々と呼び立て〻は、兎に角いぢめたがるのでございます。

所が或日の事、前に申しました良秀の娘が、御文を結んだ寒紅梅の枝を持つて、長い御廊下を通りかゝりますと、遠くの遣戸の向うから、例の小猿の良秀が、大方足でも挫いたのでございませう、何時ものやうに柱へ驅け上る元氣もなく、跛を引き〳〵、一散に、逃げて參るのでございます。しかもその後からは楚をふり上げた若殿様が「柑子盗人め、待て。待て。」と仰有りながら、追ひかけていらつしやるのではございませんか。良秀の娘はこれを見ますと、ちよいとの間ためらつたやうでございますが、丁度その時逃げて來た猿が、袴の裾にすがりながら、哀れな聲を出して啼き立てましたー——と、急に可哀さうだと思ふ心が、抑へ切れなくなつたので

ございませう。片手に梅の枝をかざした儘片手に紫匂の裡の袖を輕さうにはらりと開きますと、やさしく猿を抱き上げて、若殿樣の御前に小腰をかゞめながら「恐れながら畜生でございます。どうか御勘辨遊ばしまし。」と、涼しい聲で申し上げました。

が、若殿樣の方は、氣負つて驅けてお出でになつた所でございますから、むづかしい御顏をなすつて、二三度御み足を御踏鳴しになりながら、

「何でかばふ。その猿は柑子盜人だぞ。」

「畜生でございますから、……」

娘はもう一度かう繰返しましたがやがて寂しさうにほほ笑みますと、

「それに良秀と申しますと、父が御折檻を受けますやうで、どうも只見ては居られませぬ。」と、思ひ切つたやうに申すのでございます。これには流石の若殿樣も、我を御折りになつたのでございませう。

「さうか。父親の命乞なら、抂げて赦してとらすとしよう。」

不承無承にかう仰有ると、楚をそこへ御捨になつて、元いらつしつた遣戸の方へ、その儘御歸りになつてしまひました。

三

良秀の娘とこの小猿との仲がよくなつたのは、それからの事でございます。娘は御姫樣から頂戴した黃金の鈴を、美しい眞紅の紐に下げて、それを猿の頭へ懸けてやりますし、猿は又どんな事がございましても、滅多に娘の身のまはりを離れません。或時娘の風邪の心地で、床に就きました時なども、小猿はちやんとその枕もとに坐りこんで、氣のせゐか心細さうな顏をしながら、頻に爪を嚙んで居りました。

かうなると又妙なもので、誰も今までのやうにこの小猿を、いぢめるものはございません。いや、反つてだんだん可愛がり始めて、しまひには若殿樣でさへ、時

々柿や栗を投げて御やりになつたばかりか、侍の誰やらがこの猿を足蹴にした時なぞは、大層御立腹にもなつたさうでございます。その後大殿樣がわざ〳〵良秀の娘に猿を抱いて、御前へ出るやうと御沙汰になつたのも、この若殿樣の御腹立になつた話を、御聞きになつてからだとか申しました。その序に自然と娘の猿を可愛がる所由も御耳にはいつたのでございませう。

「孝行な奴ぢや。褒めてとらすぞ。」

かやうな御意で、娘はその時、紅の袙を御褒美に頂きました。所がこの袙を又見やう見眞似に、猿が恭しく押頂きましたので、大殿樣の御機嫌は、一入よろしかつたさうでございます。でございますから、大殿樣が良秀の娘を御最愛になつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行愚愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた譯ではございません。尤もかやうな噂の立ちました起りも、無理のない所がございますが、それは又後になつて、ゆつくり御話し致しませう。こゝでは只大殿樣が、如何に美しいにした所で、繪師風情の娘などに、想ひを御懸けになる方ではないと云ふ事を、申し上げて置けば、よろしうございます。

さて良秀の娘は、面目を施して御前を下りましたが、元より悧巧な女でございますから、はしたない外の女房たちの妬を受けるやうな事もございません。反つてそれ以來、猿と一しよに何かといとしがられまして、取分け御姫樣の御側からは御離れ申した事がないと云つてもよろしい位、物見車の御供にもついぞ缺けた事はございませんでした。

が、娘の事は一先づ措きまして、これから又親の良秀の事を申し上げませう。成程猿の方は、かやうに間もなく、皆のものに可愛がられるやうになりましたが、肝腎の良秀はやはり誰にでも嫌はれて、相不變陰へまはつては、猿秀呼りをされて居りました。しかもそれが又、御邸の中ばかりではございません。現に横川の僧都樣も、

良秀と申しますと、魔障にでも御遇ひになつたやうに、顏の色を變へて、御憎み遊ばしました。(尤もこれは良秀が僧都樣の御行狀を戯畫に描いたからだなどと申しますが、何分下ざまの噂でございますから、確に左樣とは申されますまい。)兎に角、あの男の不評判は、どちらの方に伺ひましてもさう云ふ調子ばかりでございます。もし惡く云はないものがあつたと致しますと、それは二三人の繪師仲間か、或は又、あの男の繪を知つてゐるだけで、あの男の人間は知らないものばかりでございませう。

しかし實際、良秀には、見た所が卑しかつたばかりでなく、もつと人に嫌がられる惡い癖があつたのでございますから、それも全く自業自得とでもなすより外に、致し方はございません。

四

その癖と申しますのは、吝嗇で、慳貪で、恥知らずで、忘けもので、强慾で——いやその中でも取分け甚しいのは、横柄で高慢で、何時も本朝第一の繪師と申す尊を、鼻の先へぶら下げてゐる事でございませう。それも畫道の上ばかりならまだしもでございますが、あの男の負け惜しみになりますと、世間の習慣とか慣例とか申すやうなものまで、すべて莫迦に致さずには置かないのでございます。これは永年良秀の弟子になつてゐた男の話でございますが、或日さる方の御邸で名高い檜垣の巫女に御靈が憑いて、恐しい御託宣があつた時も、あの男は空耳を走らせながら、有合せた筆と墨とで、その巫女の物凄い顏を丁寧に寫して居つたとか申しました。大方御靈の御祟りも、あの男の眼から見ましたなら、子供欺し位にしか思はれないのでございませう。

さやうな男でございますから、吉祥天を描く時は、卑しい傀儡の顏を寫しましたり、不動明王を描く時は、無賴の放免の姿を像りましたり、いろ〳〵の勿體ない眞似を致しましたが、それでも當人を詰りますと「良秀の描いた神佛がその良秀に冥

罰を當てられるとは、異な事を聞くものぢや」と空嘯いてゐるではございませんか。これには流石の弟子たちも呆れ返つて、中には未來の恐ろしさに、匆々暇をとつたものも、少くなかつたやうに見うけました。――先づ一口に申しましたなら、慢業重疊とでも名づけませうか。兎に角當時天が下で、自分程の偉い人間はないと思つてゐた男でございます。

從つて良秀がどの位畫道でも、高く止つて居りましたかは、申し上げるまでもございますまい。尤もその繪でさへ、あの男のは筆使ひでも彩色でも、まるで外の繪師とは違つて居りましたから、仲の惡い繪師仲間では、山師だなどと申す評判も、大分あつたやうでございます。その連中の申しますには、川成とか金岡とか、その外昔の名匠の筆になつた物と申しますと、やれ板戸の梅の花が、月の夜毎に匂つたの、やれ屏風の大宮人が、笛を吹く音さへ聞えたのと、優美な噂が立つてゐるものでございますが、良秀の繪になりますと、何時でも必ず氣味の惡い、妙な評判だけ

しか傳はりません。譬へばあの男が龍蓋寺の門へ描きました、五種生死の繪に致しましても、夜更けて門の下を通りますと、天人の嘆息をつく音や啜り泣きする聲が、聞えたと申す事でございます。いや、中には死人の腐つて行く臭氣を、嗅いだと申すものさへございました。それから大殿樣の御云ひつけで描いた、女房たちの似繪なども、その繪に寫されたゞけの人間は、三年と盡たない中に、皆魂の拔けたやうな病氣になつて、死んだと申すではございませんか。惡く云ふちのに申させますと、それが良秀の繪の邪道に落ちてゐる、何よりの證據ださうでございます。

が、何分前にも申し上げました通り、横紙破りな男でございますから、それが反つて良秀は大自慢で、何時ぞや大殿樣が御冗談に、「その方は兎角醜いものが好きと見える。」と仰有つた時も、あの年に似ず赤い脣でにやりと氣味惡く笑ひながら、「さやうでござりまする。かいなでの繪師には總じて醜いものゝ美しさなどと申す事は、わからう筈がございませぬ。」と、横柄に御答へ申し上げました。如何に本朝第一の

給師に致せ、よくも大殿樣の御前へ出て、そのやうな高言が吐けたものでございます、先刻引合に出しました弟子が、内々師匠に「智羅永壽」と云ふ諢名をつけて、僧長慢を譏つて居りましたが、それも無理はございません。御承知でもございませうが、「智羅永壽」と申しますのは、昔震旦から渡つて參りました天狗の名でございます。

しかしこの良秀にさへ――この何とも云ひやうのない、横道者の良秀にさへたつた一つ人間らしい、情愛のある所がございました。

五

と申しますのは、良秀が、あの一人娘の小女房をまるで氣違ひのやうに可愛がつてゐた事でございます。先刻申し上げました通り、娘も至つて氣のやさしい、親思ひの女でございましたが、あの男の子煩惱は、決してそれにも劣りますまい、何しろ娘の着る物とか、髪飾とかの事と申しますと、どこの御寺の勸進にも喜捨をした事のないあの男が、金錢には更に惜し氣もなく、整へてやると云ふのでございますから、嘘のやうな氣が致すではございませんか。

が、良秀の娘を可愛がるのは、唯可愛がるだけで、やがてよい聟をとらうなどと申す事は、夢にも考へて居りません。それ所か、あの娘へ惡く云ひ寄るものでもございましたら、反つて辻冠者ばらでも驅り集めて、暗打位は喰はせ兼ねない量見でございます。でございますから、あの娘が大殿樣の御辟がゝりで小女房に上りました時も、老爺の方は大不服で、當座の間は御前へ出ても、苦り切つてばかり居りました。大殿樣が娘の美しいのに御心を惹かされて、親の不承知なのもかまはずに、召し上げたなどと申す噂は、大方かやうな容子を見たものゝ當推重から出たのでございませう。

尤も其噂は嘘でございましても、子煩惱の一心から、良秀が始終娘の下るやうに

祈つて居りましたのは確でございます。或時大殿樣の御云ひつけで、稚兒文珠を描きました時も、御寵愛の童の顏を寫しまして、見事な出來でございましたから、大殿樣も至極御滿足で、

「褒美には望みの物を取らせるぞ。遠慮なく望め。」と云ふ難有い御言が下りました。

すると良秀は畏まつて、何を申すかと思ひますと、

「何卒私の娘をば御下げ下さいまするやうに。」と臆面もなく申し上げました。外のお邸ならば兎も角も、堀河の大殿樣の御側に仕へてゐるのを、如何に可愛いからと申しまして、かやうに無躾に御暇を願ひますものが、どこの國に居りませう。これには大腹中の大殿樣も聊か御機嫌を損じたと見えまして、暫くは唯默つて良秀の顏を眺めて御居でになりましたが、やがて、

「それはならぬ。」と吐出すやうに仰有ると、急にその儘御立になつてしまひました。

かやうな事が、前後四五遍もございましたらうか。今になつて考へて見ますと、大

殿樣の良秀を御覽になる眼は、その都度にだんだんと冷やかになつていらしつたやうでございます。すると又、それにつけても、娘の方は父親の身が案じられるせるでせうでゞもございますか、曹司へ下つてゐる時などは、よく袖の袖を嚙んで、しく〳〵泣いて居りました。そこで大殿樣が良秀の娘に懸想なすつたなどと申す噂が、愈々擴がるやうになつたのでございませう。中には地獄變の屏風の由來も、實は娘が大殿樣の御意に從はなかつたからだなど〻申すものも居りますが、元よりさやうな事がある筈はございません。

私どもの眼から見ますと、大殿樣が良秀の娘を御下げにならなかつたのは、全く娘の身の上を哀れに思召したからで、あのやうな頑な親の側へやるよりは御邸に置いて、何の不自由なく暮させてやらうと云ふ難有い御考へだつたやうでございます。それは元より氣立ての優しいあの娘を、御最屓になつたのには間違ひございません。が、色を御好みになつたと申しますのは、恐らく牽强附會の說でございませう。い

や、跡方もない嘘と申した方が、宜しい位でございます。

それは兎も角もと致しまして、かやうに娘の事から良秀の御覺えが大分惡くなつて來た時でございます。どう思召したか、大殿樣は突然良秀を御召になつて、地獄變の屏風を描くやうにと、御云ひつけなさいました。

六

地獄變の屏風と申しますと、私はもうあの恐ろしい畫面の景色が、ありありと眼の前へ浮んで來るやうな氣が致します。

同じ地獄變と申しましても、良秀の描きましたのは、外の繪師のに比べますと、第一圖取りから似て居りません。それは一帖の屏風の片隅へ、小さく十王を始め眷屬たちの姿を描いて、あとは一面に紅蓮大紅蓮の猛火が劍山刀樹も爛れるかと思ふ程渦を卷いて居りました。でございますから、唐めいた冥官たちの衣裳が、點々と

黄や藍を綴つて居りまする外は、どこを見ても烈々とした火焔の色で、その中をまるで卍のやうに、墨を飛ばした黑煙と金粉を煽つた火の粉とが、舞ひ狂つて居るのでございます。

こればかりでも、隨分人の目を驚かす筆勢でございますが、その上に又、業火に燒かれて、轉々と苦しんで居ります罪人も、殆ど一人として通例の地獄繪にあるものはございません。何故かと申しますと良秀は、この多くの罪人の中に、上は月卿雲客から下は乞食非人まで、あらゆる身分の人間を寫して來たからでございます。束帶のいかめしい殿上人、五つ衣のなめかしい青女房、珠數をかけた念佛僧、高足駄を穿いた侍學生、細長を着た女の童、幣をかざした陰陽師――一々數へ立てゝ居りましたら、とても際限はございますまい。兎に角さう云ふいろ〳〵の人間が、火と煙とが逆捲く中を、牛頭馬頭の獄卒に虐まれて、大風に吹き散らされた落葉のやうに、紛々と四方八方へ逃げ迷つてゐるのでございます。鋼叉に髮をからまれて、

蛛蜘よりも手足を縮めてゐる女は、神巫の類でゞもございませうか。手矛に胸を刺し通されて、蝙蝠のやうに逆になつた男は、生受領か何かに相違ございますまい。その外或は鐵の笞に打たれるもの、或は千曳の磐着に押されるもの、或は怪鳥の嘴にかけられるもの、或は又毒龍の顎に嚙まれるもの――、呵責も亦罪人の數に應じて、幾通りあるかわかりません。

が、その中でも殊に一つ目立つて凄じく見えるのは、まるで獸の牙のやうな刀樹の頂きを半ばかすめて（その刀樹の梢にも、多くの亡者が纍々と、五體を貫かれて居りましたが）中空から落ちて來る一輛の牛車でございませう。地獄の風に吹き上げられた、その車の簾の中には、女御、更衣にもまがふばかり、綺羅びやかに裝つた女房が、丈の黑髪を炎の中になびかせて、白い頸を反らせながら、悶え苦しんで居りますが、その女房の姿と申し、又燃えしきつてゐる牛車と申し、何一つとして炎熱地獄の責苦を忍ばせないものはございません。云はゞ廣い畫面の恐ろしさが、

この一人の人物に輳つてゐるとでも申しませうか。これを見るものゝ耳の底には、自然と物凄い叫喚の聲が傳はつて來るかと疑ふ程、入神の出來映えでございました。

あゝ、これでございます、これを描く爲めに、あの恐ろしい出來事が起つたのでございます。又さもなければ如何に良秀でも、どうしてかやうに生々と奈落の苦艱が畫かれませう。あの男はこの屏風の繪を仕上げた代りに、命さへも捨てるやうな、無慘な目に出遇ひました。云はゞこの繪の地獄は、本朝第一の繪師良秀が、自分で何時か墜ちて行く地獄だつたのでございます。……

私はあの珍しい地獄變の屏風の事を申上げますのを急いだあまりに、或は御話の順序を顚倒致したかも知れません。が、これからは又引き續いて、大殿樣から地獄繪を描けと申す仰せを受けた良秀の事に移りませう。

七

良秀はそれから五六箇月の間、まるで御邸へも伺はないで、屏風の繪にばかりかゝつて居りました。あれ程の子煩惱がいざ繪を描くと云ふ段になりますと、娘の顏を見る氣もなくなると申すのではございますから、不思議なものではございませんか。先刻申し上げました弟子の話では、何でもあの男は仕事にとりかゝりますと、まるで狐でも憑いたやうになるらしうございます。いや實際當時の風評に、良秀が畫道で名を成したのは、福德の大神に祈誓をかけたからで、その證據にはあの男が繪を描いてゐる所を、そつと物陰から覗いて見ると必ず陰々として靈狐の姿が、一匹ならず前後左右に、群つてゐるのが見えるなどと申す者もございました。その位でございますから、いざ畫筆を取るとなると、その繪を描き上げると云ふより外は、何も彼も忘れてしまふのでございませう。畫も夜も一間に閉ぢこもつたきりで、滅多に日の目も見た事はございません。――殊に地獄變の屏風を描いた時は、かう云ふ夢中になり方が、甚しかつたやうでございます。

と申しますのは何もあの男が、畫も部を下した部屋の中で、結燈臺の火の下に、祕密の繪の具を合せたり、或は弟子たちを、水干やら狩衣やら、さまゞに着飾らせて、その姿を、一人づゝ丁寧に寫したり、――さう云ふ事ではございません。それ位の變つた事なら、別にあの地獄變の屏風を描かなくとも、仕事にかゝつてゐる時とさへ申しますと、何時でもやり兼ねない男なのでございます。いや、現に龍蓋寺の五種生死の圖を描きました時などは、當り前の人間なら、わざと眼を外らせて行くあの往來の屍骸の前へ、悠々と腰を下して、半ば腐れかかつた顏や手足を、髮の毛一すぢも違へずに、寫して參つた事がございました。では、その甚しい夢中になり方とは、一體どう云ふ事を申すのか、流石に御わかりにならない方もいらつしやいませう。それは唯今詳しい事は申し上げてゐる暇もございませんが、主な話を御耳に入れますと、大體先かやうな次第なのでございます。

良秀の弟子の一人が（これもやはり、前に申した男でございますが）或日繪の具

を溶いて居りますと、急に師匠が參りまして、

「己は少し午睡をしようと思ふ。がどうもこの頃は夢見が悪い。」とかう申すのでございます。別にこれは珍らしい事でも何でもございませんから、弟子は手を休めずに、唯、

「さやうでございますか。」と一通りの挨拶を致しました。所が、良秀は、何時になく寂しさうな顔をして、

「就いては、己は午睡をしてゐる間中、枕もとに坐つてゐて貰ひたいのだが。」と、遠慮がましく賴むではございませんか。弟子は何時になく、師匠が夢なぞを氣にするのは、不思議だと思ひましたが、それも別に造作のない事でございますから、

「よろしうございます。」と申しますと、師匠はまだ心配さうに、

「では奥へ來てくれ。尤も後で外の弟子が來ても、己の睡つてゐる所へは入れないやうに。」と、ためらひながら云ひつけました。奥と申しますのは、あの男が畫を描

きます部屋で、その日も夜のやうに戸を立て切つた中に、ほんやりと灯をともしながら、まだ燒筆で圖取りだけしか出來てゐない屏風が、ぐるりと立て廻してあつたそうでございます。さてこゝへ參りますと、良秀は肘を枕にして、まるで疲れ切つた人間のやうに、すや〳〵、睡入つてしまひましたが、もの〻半時とたちません中に、枕もとに居ります弟子の耳には、何とも彼とも申しやうのない、氣味の惡い聲がはいり始めました。

八

それが始めは唯、聲でございましたが、暫くしますと、次第に切れ〴〵な話になつて、云はゞ溺れかゝつた人間が水の中で呻るやうに、かやうな事を申すのでございます。

「なに、己に來いと云ふのだな。——どこへ——どこへ來いと？奈落へ來い。炎熱

地獄へ來い。――誰だ。さう云ふ貴樣は。――貴樣は誰だ――誰だと思つたら」

弟子は思はず繪の具を溶くの手をやめて、恐るく師匠の顏を、覗くやうにして透して見ますと、皺だらけな顏が白くなつた上に大粒な汗を滲ませながら、脣の干いた、齒の疎な口を喘ぐやうに大きく開けて居ります。さうしてその口の中で、何か糸でもつけて引張つてゐるかと疑ふ程、目まぐるしく動くものがあると思ひますと、それがあの男の舌だつたと申すではございませんか。切れ切れな語は元より、その舌から出て來るのでございます。

「誰だと思つたら――うん、貴樣だな。己も貴樣だらうと思つてゐた。なに、迎へに來たと？　だから來い。奈落へ來い。奈落には――奈落には己の娘が待つてゐる。」

その時、弟子の眼には、朦朧とした異形の影が、屏風の面をかすめてむらむらと下りて來るやうに見えた程、氣味の惡い心もちが致したそうでございます。勿論弟子はすぐに良秀に手をかけて、力のあらん限り搖り起しましたが、師匠は猶夢現に

獨り語を云ひつゞけて、容易に眼のさめる景色はございません。そこで弟子は思ひ切つて、側にあつた筆洗の水を、ざぶりとあの男の顏へ浴びせかけました。

「待つてゐるから、この車に乘つて來い――この車へ乘つて、奈落へ來い――」と云ふ語がそれと同時に、喉をしめられるやうな呻き聲に變つたと思ひますとやつと良秀は眼を開いて、針で刺されたよりも慌しく、矢庭にそこへ刎ね起きましたが、まだ夢の中の異類異形が、眶の後を去らないのでございませう。暫くは唯恐ろしさうな眼つきをして、やはり大きく口を開きながら、空を見つめて居りましたが、やがて我に返つた容子で

「もう好いから、あちらへ行つてくれ」と、今度は如何にも素つ氣なく、云ひつけるのでございます。弟子はかう云ふ時に逆ふと、何時でも大小言を云はれるので、匆々師匠の部屋から出て參りましたが、まだ明い外の日の光を見た時には、まるで自分が惡夢から覺めた樣な、ほつとした氣が致したとか申して居りました。

しかしこれなぞはまだよい方なので、その後一月ばかりたつてから、今度は又別の弟子が、わざわざ奥へ呼ばれますと、良秀はやはりうす暗い油火の光りの中で、繪筆を嚙んで居りましたが、いきなり弟子の方へ向き直つて、

「御苦勞だが、又裸になつて貰はうか。」と申すのでございます。これはその時までも、どうかすると師匠が云ひつけた事でございますから、弟子は早速衣類をぬぎすてて、赤裸になりますと、あの男は妙に顏をしかめながら、

「わしは鎖で縛られた人間が見たいと思ふのだが、氣の毒でも暫くの間、わしのする通りになつてゐてはくれまいか。」と、その癖少しも氣の毒らしい容子などは見せずに、冷然とかう申しました。元來この弟子は費用などを握るよりも、太刀でも持つた方が好ささうな、逞しい若者でございましたが、これには流石に驚いたと見えて、後々までもその時の話を致しますと、「これは師匠が氣が違つて、私を殺すのではないかと思ひました」と繰返して申したさうでございます。が、良秀の方では、

相手の愚圖々々してゐるのが、燥つたくなつて參つたのでございませう。どこから出したか、細い鐵の鎖をざらぐと手繰りながら、殆ど飛びつくやうな勢ひで、弟子の脊中へ乘りかかりますと、否應なしにその儘兩腕を捻ぢあげて、ぐるぐる卷きに致してしまひました。さうして、その鎖の端を郎懲にぐいと引きましたからたまりません。弟子の體ははづみを食つて、勢よく床を鳴らしながら、ごろりととそこへ横倒しに倒れてしまつたのでございます。

九

その時の弟子の恰好は、まるで酒甕を轉がしたやうだとでも申しませうか。何しろ手も足も慘たらしく折り曲げられて居りますから、動くのは唯首ばかりでございます。そこへ肥つた體中の血が、鎖に循環を止められたので、顏と云はず胴と云はず、一面に皮膚の色が赤み走りて參るではございませんか。が、良秀にはそれも格

別氣にならないと見えまして、その酒甕のやうな體のまはりを、あちこちと廻つて眺めながら、同じやうな寫眞の圖を何枚となく描いて居ります。その間、縛られてゐる弟子の身が、どの位苦しかつたかと云ふ事は、何もわざ〳〵取り立てゝ申し上げるまでもございますまい。

が、もし何事も起らなかつたと致しましたら、この苦しみは恐らくまだその上にも、つゞけられた事でございませう。幸（と申しますより、或は不幸にと申した方がよろしいかも知れません。）暫く致しますと、部屋の隅にある壺の蔭から、まるで黒い油のやうなものが、一すぢ細くうねりながら、流れ出して參りました。それが始の中は餘程粘り氣のあるものゝやうに、ゆつくり動いて居りましたが、だん〳〵滑らかに辷り始めて、やがてちら〳〵光りながら、鼻の先まで流れ着いたのを眺めますと、弟子は思はず、息を引いて、

「蛇が――蛇が。」と喚きました。その時は全く體中の血が一時に凍るかと思つたと

申しますが、それも無理はございません。蛇は實際もう少しで、鎖の食ひこんでゐる、頸の肉へその冷い舌の先を觸れやうとしてゐたのでございます。この思ひもよらない出來事には、いくら横道な良秀でも、ぎよつと致したのでございませう。慌てて畫筆を投げ棄てながら、咄嗟に身をかがめたと思ふと、素早く蛇の尾をつかまへて、ぶらりと逆に吊り下げました。蛇は吊り下げられながらも、頭を上げて、きり〳〵と自分の體へ卷きつきましたが、どうしてもあの男の手の所まではとどきません。

「おのれ故に、あつたら一筆を仕損じたぞ。」

良秀は忌々しさうにかう呟くと、蛇はその儘部屋の隅の壺の中へ抛りこんでそれからさも不承無承に、弟子の體へかゝつてゐる鎖を解いてくれました。それも唯解いてくれたと云ふ丈で、肝腎の弟子の方へは、優しい言葉一つかけてはやりません。大方弟子が蛇に嚙まれるよりも、寫眞の一筆を誤つたのが、業腹だつたのでご

ざいませう。――後で聞きますと、この蛇もやはり姿を寫す爲にわざ〳〵あの男が飼つてゐたのださうでございます。

これだけの事を御聞きになつたのでも、良秀の氣違ひじみた、薄氣味の惡い夢中になり方が、略御わかりになつた事でございませう。所が最後に一つ、今度はまだ十三四の弟子が、やはり地獄變の屏風の御かげで、云はゞ命にも關はり兼ねない、恐ろしい目に出遇ひました。その弟子は生れつき色の白い女のやうな男でございましたが、或夜の事、何氣なく師匠の部屋へ呼ばれて參りますと、良秀は燈臺の火の下で掌に何やら腥い肉をのせながら、見慣れない一羽の鳥を養つてゐるのでございます。大きさは先、世の常の猫ほどもございませうか。さう云へば、耳のやうに兩方へつき出た羽毛と云ひ、琥珀のやうな色をした、大きな圓い眼と云ひ、見た所も何となく猫に似て居りました。

十

元來良秀と云ふ男は、何でも自分のしてゐる事に嘴を入れられるのが大嫌ひで、先刻申し上げた蛇などもさうでございますが、自分の部屋の中に何があるか、一切さう云ふ事は弟子たちにも知らせた事がございません。でございますから、或時は机の上に髑髏がのつてゐたり、或時は又、銀の椀や蒔繪の高坏が並んでゐたり。その時描いてゐる畫次第で、隨分思ひもよらない物が出て居りました。が、ふだんはかような品を、一體どこにしまつて置くのか、それは又誰にもわからなかつたさうでございます。あの男が福德の大神の冥助を受けてゐるなどゝ申す噂も、一つは確にさう云ふ事が起りになつてゐたのでございませう。

そこで弟子は、机の上のその異樣な鳥も、やはり地獄變の屏風を描くのに入用なのに違ひないと、かう獨り考へながら、師匠の前へ畏まつて、「何か御用でございま

すか」と、恭しく申しますと、良秀はまるでそれが聞えないやうにあの赤い脣へ舌なめずりをして、

「どうだ。よく馴れてゐるではないか。」と、鳥の方へ顎をやります。

「これは何と云ふものでございませう。私はついぞまだ、見た事がございませんが。」

弟子はかう申しながら、この耳のある、猫のやうな鳥を、氣味惡さうにじろじろ眺めますと、良秀は不相變何時もの嘲笑ふやうな調子で、

「なに、見た事がない？　都育ちの人間はそれだから困る。これは二三日前に鞍馬の獵師がわしにくれた耳木兎と云ふ鳥だ。唯、こんなに馴れてゐるのは、澤山あるまい。」

かう云ひながらあの男は、徐に手をあげて、丁度餌を食べてしまつた耳木兎の脊中の毛を、そつと下から撫で上げました。するとその途端でございます。鳥は急に鋭い聲で、短く一聲啼いたと思ふと、忽ち机の上から飛び上つて、兩脚の爪を張り

ながら、いきなり弟子の顏へとびかゝりました。もしその時、弟子が袖をかざして、慌てゝ隱さなかつたなら、きつともう疵の一つや二つは負はされて居りましたらう。あつと云ひながら、その袖を振つて、逐ひ拂はうとする所を、耳木兎は蓋にかかつて、嘴を鳴らしながら、又一突き――弟子は師匠の前も忘れて、立つては防ぎ、坐つては逐ひ、思はず狹い部屋の中を、あちらこちらと逃げ惑ひました。怪鳥も元よりそれにつれて、高く低く翔りながら、隙さへあれば驀地に眼を目がけて飛んで來ます。その度にばさ〳〵と、凄じく翼を鳴らすのが、落葉の匂だか、瀧の水沫とも或は又猿酒の饐るたいきれだか何やら怪しげなものゝけはひを誘つて、氣味の惡さと云つたらございません。さう云へばその弟子も、うす暗い油火の光さへ朧げな月明りかと思はれて、師匠の部屋がその儘遠い山奥の、妖氣に閉された谷のやうな、心細い氣がしたと申したさうでございます。

しかし弟子が恐しかつたのは、何も耳木兎に襲はれると云ふ、その事ばかりでは

ございません。いや、よれよりも一層身の毛がよだつたのは、師匠の良秀がその騒ぎを冷然と眺めながら、徐に紙を展べ筆を舐つて、女のやうな少年が異形の鳥に虐まれる、物凄い有樣を寫してゐた事でございます。弟子は一目それを見ますと、忽ち云ひやうのない恐ろしさに脅かされて、實際一時は師匠の爲に、殺されるのではないかとさへ、思つたと申して居りました。

十一

實際師匠に殺されると云ふ事も、全くないとは申されません。現にその晩わざわざ弟子を呼びよせたのでさへ、實は木兎を唆かけて弟子の逃げまはる有樣を寫さうと云ふ魂膽らしかつたのでございます。でございますから、弟子は、師匠の睿子を一目見るが早いか、思はず兩袖に頭を隱しながら、自分にも何と云つたかわからないやうな悲鳴をあげて、その儘部屋の隅の遣戸の裾へ、居すくまつてしまひました。

とその拍子に、良秀も何やら慌てたやうな聲をあげて、立上つた氣色でございましたが、忽ち木兎の羽音が一層前よりもはげしくなつて、物の倒れる音や破れる音が、けたゝましく聞えるではございませんか。これには弟子も二度、色を失つて、思はず隱してゐた頭を上げて見ますと部屋の中は何時かまつ暗になつてゐて、師匠の弟子たちを呼び立てる聲が、その中で苛立しさうにして居ります。

やがて弟子の一人が、遠くの方で返事をして、それから灯をかざしながら、急いでやつて參りましたが、その煤臭い明りで眺めますと、結燈臺が倒れたので、床も疊も一面に油だらけになつた所へ、さつきの耳木兎が片方の翼ばかり苦しさうにはためかしながら、轉げまわつてゐるのでございます。良秀は机の向うで半ば體を起した儘、流石に呆氣にとられたやうな顏をして、何やら人にはわからない事を、ぶつ〳〵呟いて居りました。——それも無理ではございません。あの木兎の體には、まつ黑な蛇が一匹、頸から片方の翼へかけて、きりきりと捲きついてゐるのでござ

います。大方これは弟子が居すくまる拍子に、そこにあつた壺をひつくり返して、その中の蛇が這ひ出したのを、木兎がなまじひに摑みかゝらうとしたばかりに、と う〳〵かう云ふ大騒ぎが始まつたのでございませう。二人の弟子は互に眼と眼を見合せて、暫くは唯、この不思議な光景をぼんやり眺めて居りましたが、やがて師匠に默禮をして、こそ〳〵部屋へ引き下つてしまひました。蛇と木兎とがその後どうなつたか、それは誰も知つてゐるものはございません。――

かう云ふ類の事は、その外まだ、幾つとなくございました。前には申し落しましたが、地獄變の屏風を描けと云ふ御沙汰があつたのは、秋の初でございますから、それ以來冬の末まで、良秀の弟子たちは、絶えず師匠の怪しげな振舞に脅かされてゐた譯でございます。が、その冬の末に良秀は何か屏風の畫で、自由にならない事が出來たのでございませう、それまでよりは、一層容子も陰氣になり、物云ひも目に見えて、荒々しくなつて參りました。と同時に又屏風の畫も、下畫が八分通り出

來上つた儘、更に捗どる模樣はございません。いや、どうかすると今までに描いた所さへ、塗り消してもしまひ兼ねない氣色なのでございます。

その癖、屏風の何が自由にならないのだか、それは誰にもわかりません。又誰もわからうとしたものもございますまい。前のいろ〳〵な出來事に懲りてゐる弟子たちは、まるで虎狼と一つ檻にでもゐるやうな心もちで、その後師匠の身のまはりへは、成る可く近づかない算段をして居りましたから。

十二

從つてその間の事に就いては、別に取り立てゝ申し上げる程の御話もございません。もし強ひて申し上げると致しましたら、それはあの強情な老爺が、何故か妙に涙脆くなつて、人のゐない所では時々獨りで泣いてゐたと云ふ御話位なものでございませう。殊に或日、何かの用で弟子の一人が、庭先へ參りました時なぞは廊下に

立つてぼんやり春の近い空を眺めてゐる師匠の眼が、涙で一ぱいになつてゐるたそうでございます。弟子はそれを見ますと、反つてこちらが恥しいやうな氣がしたので、默つてこそ〳〵引き返したと申す事でございますが五趣生死の圖を描く爲には、道ばたの死骸さへ寫したと云ふ、傲慢なあの男が屏風の畫が思ふやうに描けない位の事で、子供らしく泣き出すなどと申すのは隨分異なものでございませんか。

所が一方良秀がこのやうに、まるで正氣の人間とは思はれない程夢中になつて、屏風の繪を描いて居ります中に、又一方ではあの娘が、何故かだん〳〵氣鬱になつて、私どもにさへ涙を堪へてゐる容子が、眼に立つて參りました、それが元來愁顏の、色の白い、つゝましやかな女だけに、かうなると何だか睫毛が重くなつて、眼のまはりに隈がかゝつたやうな、餘計寂しい氣が致すのでございます。初はやれ父思ひのせゐだの、やれ戀煩ひをしてゐるからだの、いろ〳〵臆測を致したものでございますが、中頃から、なにあれは大殿樣が御意に從はせやうとしていらつしやるのだと云ふ評判が立ち始めて、夫からは誰も忘れた樣に、ぱつたりあの娘の噂をしなくなつて了ひました。

丁度その頃の事でございませう。或夜、更が闌けてから、私が獨り御廊下を通りかゝりますと、あの猿の良秀がいきなりどこからか飛んで參りまして、私の袴の裾を頻りにひつぱるのでございます、確、もう梅の匂でも致しさうなうすい月の光のさしてゐる、暖い夜でございましたが、其明りですかして見ますと、猿はまつ白な齒をむき出しながら、鼻の先へ皺をよせて、氣が違はないばかりにけたゝましく啼き立てゝゐるのではございませんか。私は氣味の惡いのが三分と、新しい袴をひつぱられる腹立たしさが七分とで、最初は猿を蹴放して、その儘通りすぎようかとも思ひましたが、又思ひ返して見ますと、前にこの猿を折檻して、若殿樣の御不興を受けた侍の例もございます。それに猿の振舞が、どうも唯事とも思はれません。そこでとう〳〵私も思ひ切つて、そのひつぱる方へ五六間歩くともなく歩いて參りま

した。

すると御廊下が一曲り曲つて、夜目にもうす白い御池の水が枝ぶりのやさしい松の向うにひろ〳〵と見渡せる、丁度そこ迄參つた時の事でございます。どこか近くの部屋の中で人の爭つてゐるらしいけはひが、慌しく、又妙にひつそりと私の耳を脅しました。あたりはどこも森と靜まり返つて、月明りとも靄ともつかないものゝ中で、魚の跳る音がする外は、話し聲一つ聞えません。そこへこの物音でございますから。私は思はず立止つて、もし狼藉者でゞもあつたなら、目にもの見せてくれようと、そつとその遣戸の外へ、息をひそめながら身をよせました。

十三

所が猿は私のやり方がまだるかつたのでございませう。良秀はさもさももどかしそうに、二三度私の足のまわりを駈けまはつたと思ひますと、まるで咽を絞められ

たやうな聲で啼きながら、いきなり私の肩のあたりへ一足飛に飛び上りました。私は思はず頸を反らせて、その爪にかけられまいとする、猿は又水干の袖にかじりついて、私の體から辷り落ちまいとする、――その拍子に、私はわれ知らず二足三足よろめいて、その遣り戸へ後ざまに、したゝか私の體を打ちつけました。かうなつてはもう一刻も躊躇してゐる場合ではございません。私は矢庭に遣り戸を開け放して、月明りのとどかない奥の方へ跳りこまうと致しました。が、その時の眼を遮つたものは――いや、それよりももつと私は、同時にその部屋の中から、彈かれたやうに駈け出さうとした女の方に驚かされました。女は出合頭に危く私に衝き當らうとして、その儘外へ轉び出ましたが、何故かそこへ膝をついて、息を切らしながら私の顔を、何か恐ろしいものでも見るやうに、戰き〳〵見上げてゐるのでございます。

それが良秀の娘だつたことは、何もわざ〳〵申し上げるまでもございますまい。

が、その晩のあの女は、まるで人間が違つたやうに、生々と私の眼に映りました。眼は大きくかゞやいて居ります。頰も赤く燃えて居りましたらう。そこへしどけなく亂れた袴や袿が、何時もの幼さとは打つて變つた艶しささへも添へてをります。これが實際あの弱々しい、何事にも控へ目勝な良秀の娘でございませうか。——私は遣り戸に身を支へて、この月明りの中にゐる美しい娘の姿を眺めながら、慌しく遠のいて行くもう一人の足音を、指させるものゝやうに指さして、誰ですと靜に眼で尋ねました。

すると娘は脣を嚙みながら、默つて首をふりました。その容子が如何にも亦口惜しさうなのでございます。

そこで私は身をかゞめなら、娘の耳へ口をつけるやうにして、今度は「誰です」と小聲で尋ねました。が、娘はやはり首を振つたばかりで、何とも返事を致しません。いや、それと同時に長い睫毛の先へ、涙を一ぱいためながら、前よりも緊く脣を嚙み

しめてゐるのでございます。

性得愚な私には、分りすぎてゐる程分つてゐる事の外は、生憎何一つ呑みこめません。でございますから、私は言のかけやうも知らないで、暫くは唯、娘の胸の動悸に耳を澄ませるやうな心もちで、ぢつとそこに立ちすくんで居りました。尤もこれは一つには、何故かこの上問ひ訊すのが惡いやうな、氣咎めが致したからでもございます。——

それがどの位續いたか、わかりません。が、やがて明け放した遣り戸を閉しながら少しは上氣の褪めたらしい娘の方を見返つて、「もう曹司へお歸りなさい」と出來る丈けやさしく申しました。さうして私も自分ながら、何か見てはならないものを見たやうな、不安な心もちに脅されて、誰にともなく恥しい思ひをしながら、そつと元來た方へ歩き出しました。所が十歩と歩かない中に、誰か又私の袴の裾を、後から恐る〳〵、引き止めるではございませんか。私は驚いて、振り向きました。あ

なた方はそれが何だつたと思召します？

見るとそれは私の足もとにあの猿の良秀が、人間のやうに兩手をついて、黄金の鈴を鳴しながら、何度となく丁寧に頭を下げてゐるのでございました。

十四

するとその晩の出來事があつてから、半月ばかり後の事でございます。或日良秀は突然御邸へ參りまして、大殿樣へ直の御眼通りを願ひました。卑しい身分のものでございますが、日頃から格別御意に入つてゐたからでございませう。誰にでも容易に御會ひになつた事のない大殿樣が、その日も快く御承知になつて、早速御前近くへ御召しになりました。あの男は例の通り、香染めの狩衣に萎えた烏帽子を頂いて、何時もよりは一層氣むづかしさうな顏をしながら、恭しく御前へ平伏致しましたが、やがて嗄れた聲で申しますには

「參ね〳〵御云ひつけになりました地獄變の屏風でございますが、私も日夜に丹誠を抽んでて、筆を執りました甲斐が見えまして、もはやあらましは出來上つたのも同前でございまする。」

「それは目出度い。予も滿足ぢや。」

しかしかう仰有る大殿樣の御聲には、何故か妙に力の無い、張合のぬけた所がございました。

「いえ、それが一向目出度くはござりませぬ。」良秀は、稍腹立しさうな容子でぢつと眼を伏せながら、「あらましは出來上りましたが、唯一つ、今以て私には描けぬ所がございまする。」

「なに、描けぬ所がある？」

「さやうでございまする。私は總じて、見たものでなければ描けませぬ。よし描けても、得心が參りませぬ。それでは描けぬも同じ事でございませぬか。」

これを御聞きになると、大殿樣の御顏には、嘲るやうな御微笑が浮びました。

「では地獄變の屏風を描かうとすれば、地獄を見なければなるまいな。」

「さやうでござりまする。が、私が先年大火事がござりました時に、炎熱地獄の猛火にもまがふ火の手を、眼のあたりに眺めました。「よぢり不動」の父焰を描きましたのも、實はあの火事に遇つたからでございまする。御前もあの繪は御承知でございませう。」

「しかし罪人はどうぢや。獄卒は見た事があるまいな。」大殿樣はまるで良秀の申す事が御耳にはいらなかつたやうな御容子で、かう疊みかけて御尋ねになりました。

「私は鐵の鎖に縛られたものを見た事がございまする。怪鳥に惱まされるもの〻姿も、具に寫しとりました。されば罪人の呵責に苦しむ樣も知らぬと申されませぬ。又獄卒は——」と云つて、良秀は氣味の惡い苦笑を洩らしながら、「又獄卒は、夢現に何度となく、私の眼に映りました、或は牛頭、或は馬頭、或は三面六臂の鬼

の形が、音のせぬ手を拍き、聲の出ぬ口を開いて、私を虐みに參りますのは、殆ど毎日毎夜のことと申してもよろしうございませう。——私の描かうとして描けぬのは、そのやうなものではございませぬ。」

それには大殿樣も、流石に御驚きになつたでございませう。暫くは唯苛立たしさうに、良秀の顏を睨めて御出になりましたが、やがて眉を險しく御動かしになりながら、

「では何が描けぬと申すのぢや。」と打捨るやうに仰有いました。

十五

「私は屏風の唯中に、檳榔毛の車が一輛空から落ちて來る所を描かうと思つて居りまする。」良秀はかう云つて、始めて鋭く大殿樣の御顏を眺めました。あの男は畫の事と云ふと、氣違ひ同樣になるとは聞いて居りましたが、その時の眼のくばりには

確にさやうな恐ろしさがあつたやうでございます。

「その車の中には、一人のあでやかな上﨟が、猛火の中に黒髪を亂しながら、悶え苦しんでゐるのでございまする。顔は煙に烟びながら、眉を顰めて、空ざまに車蓋を仰いで居りませう。手は下簾を引きちぎつて、降りかゝる火の粉の雨を防がうとして居るかも知れませぬ。さうしてそのまわりには、怪しげな鷙鳥が十羽となく、二十羽となく、嘴を鳴らして紛々と飛び繞つてゐるのでございまする。——あゝ、それが、その牛車の中の上﨟が、どうしても私には描けませぬ。」

「さうして——どうぢや。」

大殿樣はどう云ふ譯か、妙に悅ばしさうな御氣色で、かう良秀を御促しになりました。が、良秀は例の赤い脣を熱でも出た時のやうに震はせながら、夢を見てゐるのかと思ふ調子で、

「それが私には描けませぬ。」と、もう一度繰返しましたが、突然嚙みつくやうな勢ひになつて、

「どうか檳榔毛の車を一輛、私の見てゐる前で、火をかけて頂きたうございまする。さうしてもし出來まするならば——」

大殿は御顏を暗くなすつたかと思ふと、突然けたたましく御笑ひになりました。さうしてその御笑ひ聲に息をつまらせながら、仰有いますには、

「おゝ、萬事その方が申す通りに致して遣はそう。出來る出來ぬの詮議は無益の沙汰ぢや。」

私はその御言を伺ひますと、蟲の知らせか、何となく凄じい氣が致しました。實際又大殿樣の御容子も、御口の端には白く泡がたまつて居りますし、御眉のあたりにはびく〳〵と電が走つて居りますし、まるで良秀のもの狂ひに御染みなすつたのかと思ふ程、唯ならなかつたのでございます。それがちよいと言を御切りになると、すぐ又何かが爆ぜたやうな勢ひで、止め度なく喉を鳴らして御笑ひになりながら、

「檳榔毛の車にも火をかけよう。又その中にはあでやかな女を一人、上﨟の裝をさせて乘せて遣はそう。炎と黑煙とに攻められて、車の中の女が、悶え死にする――それを描かうと思ひついたのは、流石に天下第一の繪師ぢや。褒めてとらす。お〻、褒めてとらすぞ。」

大殿樣の御言葉を聞きますと、良秀は急に色を失つて喘ぐやうに唯、脣ばかり動して居りましたが、やがて體中の筋が緩んだやうに、べつたりと疊へ兩手をつくと、

「難有い仕合でございまする。」と、聞えるか聞えないかわからない程低い聲で丁寧に御禮を申し上げました。これは大方自分の考へてゐた目ろみの恐ろしさが、大殿樣の御言葉につれてあり〳〵と目の前へ浮んで來たからでございませうか。私は一生の中に唯一度、この時だけは良秀が、氣の毒な人間に思はれました。

十六

それから二三日した夜の事でございます。大殿樣は御約束通り、良秀を御召しになつて、檳榔毛の車の燒ける所を、目近く見せて御やりになりました。尤もこれは堀河の御邸であつた事ではございません。俗に雪解の御所と云ふ、昔大殿樣の妹君がいらつした洛外の山莊で、御燒きになつたのでございます。

この雪解の御所と申しますのは、久しくどなたにも御住ひにはならなかつた所で、廣い御庭も荒れ放題荒れ果てて居りましたが、大方この人氣のない御容子を拜見した者の當推量でございませう。こゝで御歿くなりになつた妹君の御身の上にも、兎角の噂が立ちまして、中には又月のない夜毎々々に、今でも怪しい御袴の緋の色が、地にもつかず御廊下を歩むなどと云ふ取沙汰を致すものもございました。――それも無理ではございません。晝でさへ寂しいこの御所は、一度日が暮れたとなりますと、遣り水の音が一際陰に響いて、星明りに飛ぶ五位鷺も、怪形の物かと思ふ程、氣味が惡いのでございますから。

丁度その夜はやはり月のない、まつ暗な晩でございましたが、大殿油の灯影で眺めますと、縁に近く座を御占めになつた大殿樣は、淺黄の直衣に濃い紫の浮紋の指貫を御召しになつて、白地の錦の縁を取つた圓座に、高々とあぐらを組んでゐらつしやいました。その前後左右に御側の者どもが五六人、恭しく居並んで居りましたのは、別に取り立てて申し上げるまでもございますまい。が、中に一人、眼だつて事ありげに見えたのは、先生陸奥の戰ひに餓えて人の肉を食つて以來、鹿の生角さへ裂くやうになつたと云ふ强力の侍が、下に腹卷を着こんだ容子で、太刀を鷗尻に佩き反らせながら、御縁の下に嚴しくつくばつてゐた事でございます。——それが皆、夜風に靡く灯の光で、或は明るく、或は暗く、殆ど夢現を分たない氣色で、何故かもの凄く見え渡つて居りました。

その上に又、御庭に引き据ゑた檳榔毛の車が、高い車蓋にのつしりと暗を抑へて、牛はつけず黑い轅を斜に榻へかけながら、金物の黃金の星のやうに、ちらちら光ら

せてゐるのを眺めますと、春とは云ふものゝ何となく肌寒い氣が致します。尤もその車の內は、浮線綾の縁をとつた靑い簾が、重く封じこめて居りますから、輧には何がはいつてゐるか判りません。さうしてそのまわりには仕丁たちが、手ん手に燃えさかる松明を執つて、煙が御縁の方へ靡くのを氣にしながら、仔細らしく控へて居ります。

當の良秀は稍離れて、丁度御縁の眞向に、跪いて居りましたが、これは何時もの香染めらしい狩衣に萎えた揉帽子を頂いて、星空の重みに壓されたかと思ふ位、何時もよりは猶小さく、見すぼらしげに見えました。その後に又一人同じやうな烏帽子狩衣の蹲つたのは、多分召し連れた弟子の一人でもございませうか。それが丁度二人とも、遠いうす暗がりの中に蹲つて居りますので、私のゐた御縁の下からは、狩衣の色さへ定かにはわかりません。

十七

時刻は彼是眞夜中にも近かつたでございませう。林泉をつゝんだ暗がひつそりと聲を呑んで、一同のする息を窺つてゐると思ふ中には、唯かすかな夜風の渡る音がして、松明の煙がその度に煤臭い匂を送つて參ります。大殿樣は暫く默つて、この不思議な景色をぢつと眺めていらつしやいましたが、やがて膝を御進めになりますと、

「良秀、」と、鋭く御呼びかけになりました。

良秀は何やら御返事を致したやうでございますが、私の耳には唯、唸るやうな聲しか聞えて參りません。

「良秀。今宵はその方の望み通り、車に火をかけて見せて遣はさう。」

大殿樣はかう仰有つて、御側の者たちの方を流し眄に御覽になりました。その時

何か大殿樣と御側の誰彼との間には、意味ありげな微笑が交されたやうにも見うけましたが、これは或は私の氣のせゐかも分りません。すると良秀は畏るゝは頭を擧げて御緣の上を仰いだらしうございますが、やはり何も申し上げずに控へて居ります。

「よう見い。それは予の日頃乘る車ぢや。その方も覺えがあらう。——予はその車にこれから火をかけて、目のあたりに炎熱地獄を現ぜさせる心算ぢやが。」

大殿樣は又言を御止めになつて、御側の者たちに眴せをなさいました。それから急に苦々しい御調子で、「その内には罪人の女房が一人、縛めた儘、乘せてある。されば車に火をかけたら、必定その女めは肉を燒き骨を焦して、四苦八苦の最期を遂げるであらう。その方が屏風を仕上げるには、又とないよい手本ぢや。雪のやうな肌が燃え爛れるのを見のがすな。黑煙が火の粉になつて、舞ひ上るさまもよう見て置け。」

大殿樣は三度口を御噤みになりましたが、何を御思ひになつたのか、今度は唯肩を搖つて、聲を立てずに御笑ひなさりながら、

「末代までにない觀物ぢや。予もここで見物しやう。それ〳〵、簾を揚げて、良秀に中の女を見せて遣さぬか。」

仰を聞くと仕丁の一人は、片手に松明の火を高くかざしながら、つか〳〵と車に近づくと、矢庭に片手をさし伸ばして、簾をさらりと揚げて見せました。けたゝましく音を立てて燃える松明の光は、一しきり赤くゆらぎながら、忽ち狹い悲の中を鮮かに照し出しましたが、梱の上に慘らしく、鎖にかけられた女房は——あゝ、誰か見違へを致しませう。きらびやかな繡のある櫻の唐衣にすべらかし黑髪が艶やかに垂れて、うちかたむいた黃金の釵子も美しく輝いて見えましたが、身なりこそ違へ、小造りな體つきは、色の白い頸のあたりは、さうしてあの寂しい位つゝましやかな横顏は、良秀の娘に相違ございません。私は危く叫び聲を立てようと致しました。

その時でございます。私と向ひあつてゐた侍は慌しく身を起して、柄頭を片手に抑へながら、屹と良秀の方を睨みました。それに驚いて眺めますと、あの男はこの景色に、半ば正氣を失つたのでございませう。今まで下に蹲つてゐたのが、急に飛び立つたと思ひますと、兩手を前へ伸した儘、車の方へ思はず知らず走りかゝらうと致しました。唯生憎前にも申しました通り、遠い影の中に居りますので、顏貌はは つきりと分りません。しかしさう思つたのはほんの一瞬間で、色を失つた良秀の顏はいや、まるで何か目に見えない力が、宙へ吊り上げたやうな良秀の姿は、忽ちうす暗がりを切り拔いてあり〳〵と眼前へ浮び上りました。娘を乘せた檳榔毛の車が、この時、「火をかけい」と云ふ大殿樣の御言と共に、仕丁たちが投げる松明の火を浴びて炎々と燃え上つたのでございます。

十八

火は見る〳〵中に、車蓋をつゝみました。庇についた紫の流蘇が、煽られたやうにさつと靡くと、その下から濛々と夜目にも白い煙が渦を卷いて、或は簾、或は袖、或は棟の金物が、一時に碎けて飛んだかと思ふ程、火の粉が雨のやうに舞ひ上る——その凄じさと云つたらございません。いや、それよりもめらめらと舌を吐いて袖格子に搦みながら、半空までも立ち昇る烈々とした炎の色はまるで日輪が地に落ちて、天火が迸つたやうだとでも申しませうか。前に危く叫ばうとした私も、今は全く魂を消して、唯茫然と口を開きながら、この恐ろしい光景を見守るより外はございませんでした。しかし親の良秀は——

良秀のその時の顔つきは、今でも私は忘れません。思はず知らず車の方へ驅け寄らうとしたあの男は、火が燃え上ると同時に、足を止めて、やはり手をさし伸した

儘、食ひ入るばかりの眼つきをして、車をつゝむ焔煙を吸ひつけられたやうに眺めて居りましたが、滿身に浴びた火の光で、皺だらけな醜い顔は、髭の先までよく見えます。が、その大きく見開いた眼の中と云ひ、引き歪めた脣のあたりと云ひ、或は又絶えず引き攣まつてゐる頰の肉の震へと云ひ、良秀の心に交々往來する恐れと悲しみと驚きとは、歴々と顔に描かれました。首を刎ねられる前の盗人でも、乃至は十王の廳へ引き出された、十逆五惡の罪人でもあゝまで苦しさうな顔を致しますまい。これには流石にあの強力の侍でさへ、思はず色を變へて、畏る〳〵大殿樣の御顔を仰ぎました。

が、大殿樣は緊く唇を御嚙みになりながら、氣味惡く御笑ひになつて、眼も放さずぢつと車の方を御見つめになつていらつしやいます。さうしてその車の中には——あゝ、私はその時、その車にどんな娘の姿を眺めたか、それを詳しく申し上げる勇氣は、到底あらうとも思はれません。あの煙に咽んで仰向けた顔の白さ、焔を掃

つてふり亂れた髪の長さ、それから又見る間に火と變つて行く、櫻の唐衣の美しさ——何と云ふ慘たらしい景色でございましたらう。殊に夜風が一下しして、煙が向うへ靡いた時、赤い土の上に金粉を撒いたやうな、焔の中から浮き上つて、髪を口に嚙みながら、縛の鎖も切れるばかり身悶えをした有樣は、地獄の業苦を目のあたりへ寫し出したかと疑はれて、私始め强力の侍までおのづと身の毛がよだちました。

するとその夜風が又一渡り、御庭の木々の梢にさつと通ふ——と誰でも、思ひましたらう。さう云ふ音が暗い空を、どこをも知らず走つたと思ふと、忽ち何か黑いものが、地にもつかず宙にも飛ばず、鞠のやうに躍りながら、御所の屋根から火の燃えさかる車の中へ、一文字にとびこみました。さうして朱塗のやうな袖格子が、ばら〳〵と燒け落ちる中に、のけ反つた娘の肩を抱いて、帛を裂くやうな鋭い聲を、何とも云へず苦しさうに、長く煙の外へ飛ばせました。續いて又、二聲三聲——私たちは我知らず、あつと同音に叫びました。壁代のやうな焔を後にして、娘の肩に

縋つてゐるのは、堀河の御邸に繫いであつた、あの良秀と渾名のある、猿だつたのでございますから。その猿が何處をどうしてこの御所まで、忍んで來たか、それは勿論誰にもわかりません。が、日頃可愛がつてくれた娘なればこそ、猿も一しよに火の中へはひつたのでございませう。

十九

が、猿の姿が見えたのは、ほんの一瞬間でございました。金梨子地のやうな火の粉が一しきり、ぱつと空へ上つたかと思ふ中に、猿は元より娘の姿も、黑煙の底に隱されて、御庭のまん中には唯、一輛の火の車が凄じい音を立てながら、燃え沸つてゐるばかりでございます。いや、火の車と云ふよりも、或は火の柱と云つた方が、あの星空を衝いて煮え返る、恐ろしい火焔の有樣にはふさはしいかも知れません。

その火の柱を前にして、凝り固まつたやうに立つてゐる良秀は、——何と云ふ不

思議な事でございませう。あのさつきまで地獄の責苦に惱んでゐたやうな良秀は、今は云ひやうのない輝きを、さながら恍惚とした法悅の輝きを、皺だらけな滿面に浮べながら、大殿樣の御前も忘れたのか、兩腕をしつかり胸に組んで、佇んでゐるのではございませんか。それがどうもあの男の眼の中には、娘の悶え死ぬ有樣が映つてゐないやうなのでございます。唯美しい火焰の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悅ばせる——さう云ふ景色に見えました。

しかも不思議なのは、何もあの男が一人娘の斷末魔を嬉しさうに眺めてゐた、そればかりではございません。その時の良秀には、何故か人間とは思はれない夢に見る獅子王の怒りに似た、怪しげな嚴さがございました。でございますから不意の火の手に驚いて、啼き騷ぎながら飛びまはる數の知れない夜鳥でさへ、氣のせゐか良秀の揉烏帽子のまはりへは、近づかなかつたやうでございます。恐らくは無心の鳥の眼にも、あの男の頭の上に、圓光の如く懸つてゐる、不可思議な威嚴が見えたのでございませう。

鳥でさへさうでございます。まして私たちは仕丁までも、皆息をひそめながら、身の內も震へるばかり、異樣な隨喜の心に充ち滿ちて、まるで開眼の佛でも見るやうに、眼も離さず、良秀を見つめました。空一面に鳴り渡る車の火とそれに魂を奪はれて、立ちすくんでゐる良秀と——何と云ふ莊嚴、何と云ふ歡喜でございませう。が、その中でたつた、御緣の上の大殿樣だけは、まるで別人かと思はれる程、御顏の色も靑ざめて、口元に泡を御ためになりながら、紫の指貫の膝を兩手にしつかり御つかみになつて、丁度喉の渴いた獸のやうに喘ぎつゞけていらつしやいました。

……

二十

その夜雪解の御所で、大殿樣が車を御燒きになつた事は、誰の口からともなく世

上へ洩れましたが、それに就いて　隨分いろ〳〵な批判を致すものも居つたやうでございます。先第一に何故大殿樣が良秀の娘を御燒き殺しなすつたか、――これは、かなはぬ戀の恨みからなすつたのだと云ふ噂が、一番多うございました。が、大殿樣の思召しは、全く車を燒き人を殺してまでも、屏風の畫を描かうとする繪師根性の曲なのを懲らす御心算だつたのに相違ございません。現に私は、大殿樣が御口づからさう仰有るのを伺つた事さへございます。

それからあの良秀が、目前で娘を燒き殺されながら、それでも屏風の畫を描きたいと云ふその木石のやうな心もちが、やはり何かとあげつらはれたやうでございます。中にはあの男を罵つて、畫の爲には親子の情愛も忘れてしまふ、人面獸心の曲者だなどと申すものもございました。あの横川の僧都樣などは、かう云ふ考へに味方をなすつた御一人で「如何に一藝一能に秀でやうとも、人として五常を辨へねば、地獄に墮ちるの外はない」などと、よく仰有つたものでございます。

所がその後一月ばかり經つて、愈々地獄變の屏風が出來上りますと良秀は早速それを御邸へ持つて出て、恭しく大殿樣の御覽に供へました。丁度その時は僧都樣も御居合せになりましたが、屏風の畫を一目御覽になりますと、流石にあの一帖の天地に吹き荒んでゐる火の嵐の恐しさに御驚きなすつたのでございませう。それまでは苦い顏をなさりながら、良秀の方をじろ〳〵睨めつけていらしつたのが、思はず知らず膝を打つて、「出かし居つた」と仰有いました。この言を御聞きになつて、大殿樣が苦笑なすつた時の御容子も、未だに私は忘れません。

それ以來あの男を惡く云ふものは、少くとも御邸の中だけでは、殆ど一人もゐなくなりました。誰でもあの屏風を見るものは、如何に日頃良秀を憎く思つてゐるにせよ、不思議に嚴かな心もちに打たれて、炎熱地獄の大苦艱を如實に感じるからでもございませうか。

しかしさうなつた時分には、良秀はもうこの世に無い人の數にはいつて居りまし

た。それも屏風の出來上つた次の夜に、自分の部屋の梁へ縄をかけて、縊れ死んだのでございます。一人娘を先立てたあの男は、恐らく安閑として生きながらへるのに堪へなかつたのでございませう。屍骸は今でもあの男の家の跡に埋まつて居りますす。尤も小さな標の石は、その後何十年かの雨風に曝されてとうの昔誰の墓とも知れないやうに、苔蒸してゐるにちがひがございません。

きりしとほろ上人傳

小序

これは予が嘗て三田文學紙上に掲載した「奉教人の死」と同じく、予が所藏の切支丹版「れげんだ・あうれあ」の一章に、多少の潤色を加へたものである。但し「奉教人の死」は本邦西教徒の逸事であつたが、「きりしとほろ上人傳」は古來洽く歐洲天主教國に流布した聖人行狀記の一種であるから、予の「れげんだ・あうれあ」の紹介も、彼是相俟つて始めて全豹を彷彿ずる事が出來るかも知れない。

傳中殆ど滑稽に近い時代錯誤や場所錯誤が續出するが、予は原文の時代色を損ふまいとした結果、わざと何等の筆削をも施さない事にした。大方の諸君子にして、

予が常識の有無を疑はれなければ幸甚である。

一　山ずまひのこと

遠い昔のことでおぢやる。「しりあ」の國の山奥に、「れぷろぼす」と申す山男がおぢやつた。その頃「れぷろぼす」ほどな大男は、御主の日輪の照らさせ給ふ天が下はひろしと云へ、絶えて一人もおりなかつたと申す。まづ身の丈は三丈あまりもおぢやらうか。葡萄蔓かとも見ゆる髪の中には、いたいけな四十雀が何羽とも知れず巣食うて居つた。まいて手足はさながら深山の松檜にまがうて、足音は七つの谷々にも谺するばかりでおぢやる。さればその日の糧を獵らうにも、鹿熊なんどのたぐひをとりひしぐは、指の先の一ひねりぢや。又は折ふし海べに下り立つて、すなどらうと思ふ時も、海松房ほどな髯の垂れた顎をひたと砂につけて、ある程の水を一吸ひ吸へば、鯛も鰹も尾鰭をふるふて、さは〳〵と口へ流れこんだ。ぢやによつて沖

を通る廻船さへ、時ならぬ潮のさしひきに漂はされて、水夫楫取の慌てふためく事もおぢつたと申し傳へた。

なれど「れぷろほす」は、性得心根のやさしいものでおぢやれば、山ずまひの杣獵夫は元より、往來の旅人にも害を加へたと申す事はおりない。反つて杣の伐りあぐんだ樹は推し倒し、獵夫の追ひ失うた毛物はとつておさへ、旅人の負ひなやんだ荷は肩にかけて、なにかと親切をつくいたれば、遠近の山里でもこの山男を憎まうずものは、誰一人おりなかつた。中にもとある一村では、羊飼のわらんべが行き方知れずになつた折から、夜さりそのわらんべの親が引き窓を推し開くものがあつたれば、驚きまどうて上を見たに、箕ほどな「れぷろほす」の掌が、よく眠入つたわらんべをかいのせて、星空の下から悠々と下りて來たこともおぢやると申す。何と山男にも似合ふまじい、殊勝な心映えではおぢやるまいか。

されば山賤たちも「れぷろほす」に出合へば、餅や酒などをふるまうて、へだてなく語らふことも度々おぢやつた。さるほどにある日のこと、杣の一むれが樹を伐らうずとて、檜山ふかくわけ入つたに、この山男がのさ〳〵と熊笹の奥から現れたれば、もてなし心に落葉を焚いて、德利の酒を暖めてとらせた。その滴ほどな德利の酒さへ、「れぷろほす」は大きに悅んだけしきで、頭の中に巣食うた四十雀にも、杣たちの食み殘いた飯をばらまいてとらせながら、大あぐらをかいて申したは、

「それがしも人間と生まれたれば、あつぱれ功名手がらをも致いて、末は大名ともならうずる」と云へば、杣たちも打ち興じて、

「道理かな。おぬしほどな力量があれば、城の二つ三つも攻め落さうは、片手業にも足るまじい」と云うた。その時「れぷろほす」が、ちともの案ずる體で申すやうは、

「なれどこゝに一つ、難儀なことがおぢやる。それがしは日頃山ずまひのみ致いて居れば、どの殿の旗下に立つて、合戰を仕らうやら、とんと分別を致さうやうもご

ざない。就いては當今天下無雙の强者と申すは、いづくの國の大將でござらうぞ。誰にもあれそれがしは、その殿の馬前に馳せ參じて、忠節をつくさうずる」と問うたれば、

「さればその事でおぢやる。まづわれらが量見にては、今天が下に「あんちをきや」の帝ほど、武勇に富んだ大將もおぢやるまい。」と答へた。山男はそれを聞いて、斜ならず悅びながら、

「さらばすぐさま、打ち立たうず」とて、小山のやうな身を起いたが、ここに不思議がおぢやつた申すは、頭の中に巢食うた四十雀が、一時にけたたましい羽音を殘いて、空に網を張つた森の梢へ、雛も餘さず飛び立つてしまつた事ぢや。それが斜に枝を延いた檜のうらに上つたれば、とんとその樹は四十雀が實のつたやうぢやとも申さうず。「れぷろほす」はこの四十雀のふるまひを、訝しげな眼で眺めて居つたが、やがて又一念を思ひ起いた顏色で、足もとにつどうた袖たちにねんごろな別を

つけてから、再び森の熊笹を踏み開いて、元來たやうにのしのしと、山奥へ獨り住んでしまうた。

されば「れぷろほす」が大名にならうず願望がことは、間もなく遠近の山里にも知れ渡つたが、ほど經て又かやうな噂が、風のたよりに傳はつて參つた。と申すは國ざかひの湖で、大ぜいの漁夫たちが泥に吸はれた大船を引きなずんで居つた所に、怪しげな山男がどこからか現はれて、その船の帆柱をむづとつかんだと見てあれば、苦もなく岸へひきよせて、一同の驚き呆れるひまに、早くも姿をかくしたと云ふ噂ぢや。ぢやによつて「れぷろほす」を見知つたほどの山賤たちは、皆この情ぶかい山男が、愈「しりや」の國中から退散したことを悟つたれば、西空に屏風を立てまはした山々の峯を仰ぐ毎に、限りない名殘りが惜しまれて、自らため息がもれたと申す。まいてあの羊飼のわらんべなどは、夕日が山かげに沈まうず時は、必村はづれの一本杉にたかだかとよぢのぼつて、下につどうた羊のむれも忘れたやう

に、「れぷろぼす」戀しや、山を越えてどち行つたと、かなしげな聲で呼びつづけた。さてその後「れぷろぼす」が、如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一條を知らうず方々はまづ次のくだりを讀ませられい。

二　俄大名のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、難なく「あんちをきや」の城裡に參つたが、田舍の山里とはこと變り、この「あんちをきや」の都と申すは、この頃天が下に並びない繁華の土地がらゆえ、山男が巷へはいるや否や、見物の男女夥しうむらがつて、はては通行することも出來まじいと思はれた。されば「れぷろぼす」もとんと行かうず方角を失うて、人波に腰を揉まれながら、とある大名小路の辻に立ちすくんでしまうたに、折よくそこへ來かかつたは、帝の御輦をとりまいた、侍たちの行列ぢや。見物の群集はこれに先追はれて、山男を一人殘いた儘、見る見る四方へ遠のいてし

まうた。ぢやによつて「れぷろぼす」は、大象の足にもまがはうずしたゝかな手を大地について、御輦の前に頭を下げながら、

「これは「れぷろぼす」と申す山男でござるが、唯今「あんちおきや」の帝は、天下無雙の大將と承はり、御奉公申さうずとて、はるゞ〳〵これまでまかり上つた」と申し入れた。これよりさき、帝の同勢も、「れぷろぼす」の姿に膽をけして、先手は既に槍薙刀の鞘をも拂はうずけしきであつたが、この殊勝な言を聞いて、異心もあるまじいものと思ひつらう、とりあへず行列をそこに止めて、供頭の口からその趣をしか〳〵と帝へ奏聞した。帝はこれを聞し召されて、

「かほどの大男のことなれば、一定武勇も人に超えつらう。召し抱へてとらせい」と、仰せられたれば、格別の詮義とあつて、すぐさま同勢の内へ加へられた。「れぷろぼす」の悅びは申すまでもあるまじい。ぢやによつて帝の行列の後から、三十人の力士もえ舁くまじい長櫃十棹の宰領を承つて、ほど近い御所の門まで、鼻たかだ

かと御供仕つた。まことこの時の「れぷろぼす」が、山ほどな長櫃を肩にかけて、行列の人馬を目の下に見下しながら、大手をふつてまかり通つた異形奇體の姿こそ、目ざましいものでおじやつたつたらう。

さてこれより「れぷろぼす」は、漆紋の麻袴に朱鞘の長刀を横たへて、朝夕「あんちをきや」の帝の御所を守護する役者の身となつたが、幸こゝに功名手がらを顯さうず時節が到來したと申すは、ほどなく隣國の大軍がこの都を攻めとらうと、一度に押し寄せて參つたことぢや。元來この隣國の大將は、獅子王をも手打ちにすると聞えた、萬夫不當の剛の者でおぢやれば、「あんちをきや」の帝とても、なほざりの合戰はなるまじい。ぢやによつて今度の先手は、今まゐりながら「れぷろぼす」に仰せつけられ、帝は御自ら本陣に御輦をすゝめて、號令を司られることとなつた。この采配を承つた「れぷろぼす」が、悅び身にあまりて、足の踏みども覺えなんだは、毛頭無理もおぢやるまい。

やがて味方も整へば、帝は、「れぷろぼす」をまつさきに、貝金陣太鼓の音を勇しう、國ざかひの野原に繰り出された。かくと見た敵の軍勢は、元より望むところの合戰ぢやによつて、なじかは寸刻もためらはう。野原を蔽うた旗差物が、俄に波立つたと見てあれば、一度にどつと鬨をつくつて、今にも懸け合はさうずけしきに見えた。この時「あんちをきや」の人數の中より、一人悠々と進み出いたは、別人でもない「れぷろぼす」ぢや。山男がこの日の出で立ちは、水牛の兜に南蠻鐵の鎧を着下いて、刃渡り七尺の大薙刀を柄みぢかにおつとつたれば、さながら城の大主に魂が宿つて、大地も狹しと搖ぎ出いた如くでおぢやる。さるほどに「れぷろぼす」は兩軍の唯中に立ちはだかると、その大薙刀をさしかざいて、遙に敵勢を招きながら、雷のやうな聲で呼はつたは、

「遠からんものは音にも聞け、近くばよつて目にも見よ。これは「あんちをきや」の帝が陣中に、さるものありと知られたる「れぷろぼす」と申す剛の者ぢや。辱く

ち今日は先手の大將を承り、こゝに軍を出いたれば、われと思はうずるものどもは、近う寄つて勝負せよやつ」と申した。その武者ぶりの凄じさは、昔「ぺりしで」の豪傑に「ごりあて」と聞えたが、鱗綴の大鎧に銅の矛を提げて、百萬の大軍を吐咤したにも、劣るまじいと見えたれば、さすが隣國の精兵たちも、しばしがほどは鳴を靜めて、出で合うずものもおりなかつた。ぢやによつて敵の大將も、この山男を討たいでは、かなふまじいと思ひつらう。美々しい物の具に三尺の太刀をぬぎかざいて、龍馬に泡を食ませながら、これも大音に名乘りをあげて、まつしぐらに「れぶろぼす」へ打つてかゝつた。なれどもこなたはものともせいで、大薙刀をとりのべながら、二太刀三太刀あしらうたが、やがて得物をからりと捨てゝ、猿臂をのばいたと見るほどに、早くも敵の大將を鞍壺からひきぬいて、目もはるかな大空へ、礫の如く投げ飛ばいた。その敵の大將がきりきりと宙に舞ひながら、味方の陣中へどうと落ちて、亂離骨灰になつたのと、「あんちをきや」の同勢が鯨波の聲を濟かい

て、常の御輦を中にとりこめ、雪崩の如く攻めかゝつたのとが、間に髪をも入れまじい、殆ど同時の働きぢや。されば隣國の軍勢は、一たまりもなく浮き足立つて、武具馬具のたぐひをなげ捨てながら、四分五裂に落ち失せてしまうた。まことや「あんをきや」の帝がこの日の大勝利は、味方の手にとつた兜首の數ばかりも、一年の日數よりは多かつたと申すことでおぢやる。

ぢやによつて帝は御悅び斜ならず、目でたく凱歌の裡に軍をめぐらされたが、やがて「れぶろぼす」には大名の位を加へられ、その上諸臣にも一々勝利の宴を賜つて、ねんごろに勳功をねぎらはれた。その勝利の宴を賜つた夜のことゝ思召されい。當時國々の形儀とあつて、その夜も高名な琵琶法師が、大燭臺の火の下に節面白う絃を調じて、今昔の合戰のありさまを、手にとる如く物語つた。この時「れぶろぼす」は、かねての大願が成就したことでおぢやれば、涎も垂れようずばかり笑み傾いて、餘念もなく珍陀の酒を酌みかはいてあつた所に、ふと醉うた眼にもとまつた

は、錦の幔幕を張り渡いた正面の御座にわせられる帝の異な御ふるまひぢや。何故と申せば、檢校のうたふ物語の中に、悪魔と云ふ言がおぢやると思へば、帝はあはたゞしう御手をあげて、必ず十字の印を切らせられた。その御ふるまひが怪しからずもの〳〵しげに見えたれば、「れぷろぼす」は同席の侍に、

「何として帝は、あのやうに十字の印を切らせられるぞ」と、卒爾ながら尋ねて見た。所がその侍い答へたは、

「總じて悪魔と申すものは、天が下の人間をも掌にのせて弄ぶ、大力量のものでおぢやる。ぢやによつて帝も、悪魔の障碍を拂はうずと思召され、再三十字の印を切つて、御身を守らせ給ふのぢや」と申した。「れぷろぼす」はこれを聞いて、迂論げに又問ひ返したは、

「なれど今「あんちをきや」の帝は、天が下に並びない大剛の大將と承つた。されば悪魔も御身には、一指をだに加へまじい」と申したが、侍は首をふつて、

「いや、いや、帝も、悪魔ほどの御威勢はおぢやるまい」と答へた。山男はこの答を聞くや否や、大いに憤つて申したは、

「それがしが帝に隨身し奉つたは、天下無雙の强者は帝ぢやと承つた故でおぢやる。しかるにその帝さへ、悪魔には腰を曲げられるとあるなれば、それがしはこれよりまかり出でて、悪魔の臣下と相成らうず」と喚きながら、ただちに珍陀の盃を抛つて、立ち上らうと致いたれば、一座の侍はさらいでも、「れぷろぼす」が今度の功名を妬ましう思うて居つたによつて、

「すは、山男が謀叛するわ」と、異口同音に罵り騷いで、やにはに四方八方から搦めとらうと競ひ立つた。もとより「れぷろぼす」も日頃ならば、さうなくこの侍だちに組みとめられう筈もあるまじい。なれどもその夜は珍陀の醉に前後も不覺の體ぢやによつて、しばしがほどこそ多勢を相手に、組んづほぐれつ、揉み合うても居つたが、やがて足をふみすべらいて、思はずどうとまろんだれば、えたりやおうと侍

だちは、いやが上にも折り重つて、怒り狂ふ「れぷろぼす」を高手小手に括り上げた。帝もことの體たらくを始終殘らず御覽ぜられ、

「恩を讐で返すにつくいやつめ。匆々土の牢へ投げ入れい」と、大いに逆鱗あつたによつて、あはれや「れぷろぼす」はその夜の内に、見るもいぶせい地の底の牢舍へ、禁獄せられる身の上となつた。さてこの「あんちをきや」の牢内に囚はれとなつた「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合ふたか、右の一條を知らうず方々は、まづ次のくだりを讀ませられい。

三　魔往來のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、未だ縄目もゆるされいで、土の牢の暗の底へ、投げ入れられたことでおぢやれば、しばしがほどは赤子のやうに、唯おうおうと聲を上げて、泣き喚くより外はおりなかつた。その時いづくよりとも知らず、緋の袍を

まとうた學匠が、忽然と姿を現いて、やさしげに問ひかけたは、

「如何に「れぷろぼす」おぬしは何として、かやうな所に居るぞ」とあつたれば、山男は今更ながら、瀧のやうに涙を流いて、

「それがしは、帝に背き奉つて、惡魔に仕へようずと申したれば、かやうに牢舍致されたのでおぢやる。おう、おう、おう」と歎き立てた。學匠はこれを聞いて、再びやさしげに尋ねたは、

「さらばおぬしは、今もなほ惡魔に仕へやうず望がおりやるか」と申すに、「れぷろぼす」は頭を竪に動かいて、

「今もなほ、仕へやうずる」と答へた。學匠は大いにこの返事を悅んで、土の牢も鳴りどよむばかり、からからと笑ひ興じたが、やがて三度やさしげに申したは、

「おぬしの所望は、近頃殊勝千萬ぢやによつて、これよりただちに牢舍を赦いてとらさうずる」とあつて、身にまとうた緋の袍を、「れぷろぼす」が上に蔽うたれば、

不思議や總身の縛めは、悉くはらりと切れてしまうた。山男の驚きは申すまでもあるまじい。されば恐る恐る身を起いて、學匠の顔を見上げながら、慇懃に禮を爲いて申したは、

「それがしが繩目を赦いてたまはつた御恩は、生々世々忘却つかまつるまじい。なれどもこの土の牢をば、何として忍び出で申さうずる」と云うた。學匠はこの時又えせ笑ひをして、

「かうすべいに、なじかは難からう」と申しも果ず、やにはに緋の袍の袖をひらいて、「れぷろぼす」を小脇に抱いたれば、見る見る足下が暗うなつて、もの狂ほしい一陣の風が吹き起つたと思ふほどに、二人は何時か宙を踏んで、牢舍を後に飄々と、「あんちをきや」の都の夜空へ、火花を飛いて舞ひあがつた。まことやその時は學匠の姿も、折から沈まうず月を背負うて、さながら怪しげな大蝙蝠が、黑雲の翼を一文字に飛行する如く見えたと申す。

されば「れぷろぼす」は愈膽を消いて、學匠もろとも中空を射る矢のやうに翔りながら、戰く聲で尋ねたは、

「そもそもごへんは、何人でおぢやらうぞ。ごへんほどな大神通の博士は、世にも又とあるまじいと覺ゆる」と申したに、學匠は忽ち底氣味惡いほくそ笑を洩しながら、わざとさりげない聲で答へたは、

「何を隱さう、われらは、天が下の人間を掌にのせて弄ぶ、大力量の剛の者ぢや」とあつたによつて「れぷろぼす」は始めて學匠の本性が、惡魔ぢやと申すことに合點が參つた。さるほどに惡魔はこの問答の間さへ、妖靈星の流れる如く、ひた走りに宙を走つたれば、「あんちをきや」の都の燈火も、今ははるかな闇の底に沈みはて、、やがて足もとに浮んで參つたは、音に聞く「えじつと」の沙漠でおぢやらう。幾百里とも知れまじい砂の原が、有明の月の光の中に、夜目にも白々と見え渡つた。この時學匠は爪長な指をのべて、下界をゆびさしながら申したは、「かしこの藁家に

は、さる有驗の隱者が住居致いて居ると聞いた。まづあの屋根の上に下らうずる」とあつて、「れぷろぼす」を小脇に抱いた儘、とある沙山陰のあばら家の棟へ、ひらひらと空から舞ひ下つた。

こなたはそのあはら家に行ひすまいて居つた隱者の翁ぢや。折から夜のふけたのも知らず、油火のかすかな光の下で、御經を讀誦し奉つて居つたが、忽ちえならぬ香風が吹き渡つて、雪にも紛はらず櫻の花が紛々と飜り出いたと思へば、いづくよりともなく一人の傾城が、鼈甲の櫛笄を圓光の如くさしないて、地獄繪の裳を長々とひきはえながら、天女のやうな媚を凝して、夢かとばかり眼の前へ現れた。翁はさながら「えじつと」の沙漠が、片時の内に室神崎の廓に變つたとも思ひつらう。あまりの不思議さに我を忘れて、しばしがほどは惚々と傾城の姿を見守つて居つたに、相手はやがて花吹雪を浴びながら、につこと微笑んで申したは、

「これは「あんちをきや」の都に隱れもない遊びでおぢやる。近ごろ御僧のつれづ

れを慰めまいらせうと存じたれば、はるばるこれまでまかり下つた」とあつた。その聲ざまの美しさは、極樂に棲むとやら承つた伽陵頻伽にも劣るまじい。さればすがに有驗の隱者もうかとその手に乘らうとしたが、思へばこの眞夜中に幾百里とも知らぬ「あんちおきや」の都から、傾城などの來よう筈もおぢやらぬ。さては又しても惡魔めの惡巧みであらうずと心づいたによつて、ひたと御經に眼を曝しながら、專念に陀羅尼を誦し奉つて居つたに、傾城はかまへてこの隱者の翁を落さうと心にきはめつらう。蘭麝の薫を漂はせた綺羅の袂を弄びながら、嫋々としたさまで、さも恨めしげに歎いたは、

「如何に遊びの身とは申せ、千里の山河も厭はいで、この沙漠までまかり下つたを、さりとは曲もない御方かな」と申した。その姿の妙にも美しい事は、散りしく櫻の花の色さへ消えようずると思はれたが、隱者の翁は遍身に汗を流いて、除魔の呪文を讀みかけ、讀みかけかつふつその惡魔の申す事に耳を借さうず氣色すらおりない。

されば傾城もかくてはなるまじいと氣を苛つたか、つと地獄繪の裳を飜して、斜に隱者の膝へとすがつたと思へば、

「何としてさほどつれないぞ」と、よよとばかりに泣い口說いた。と見るや否や隱者の翁は、蝎に刺されたやうに躍り上つたが、早くも肌身につけた十字架をかざして、霹靂の如く罵つたは、

「業畜、御主「えす・きりしと」の下部に向つて無禮あるまじいぞ」と申しも果てず、てうと傾城の面を打つた。打たれて傾城は落花の中に、なよなよと伏しまろんだが、忽ちその姿は見えずなつて、唯一むらの黑雲が湧き起つたと思ふほどに、怪しげな火花の雨が礫の如く亂れ飛んで、

「あら、痛や。又しても十字架に打たれたわ」と唸く聲が、次第に家の棟にのぼつて消えた。もとより隱者はかうあらうと心に期して居つたによつて、この間も祕密の眞言を絕えず聲高に誦し奉つたに、見る見る黑雲も薄れれば、櫻の花も降らずな

つて、あばら家の中には又もとの如く、油火ばかりが殘つたと申す。

なれど隱者は惡魔の障碍が猶もあるべいと思うたれば、夜もすがら御經の力にすがり奉つて、目蓋も合はさいで明いたに、やがてしらしら明けと覺しい頃、誰やら柴の扉をおとづれるものがあつたによつて、十字架を片手に立ち出でて見たれば、これは又何ぞや、藁家の前に蹲つて、恭しげに時儀を敎いて居つたは、天から降つたか、地から湧いたか、小山のやうな大男ぢや。それが早くも朱を流いた空を黑々と肩にかぎつて、隱者の前に頭を下げると、恐る恐る申したは、

「それがしは「れぶれほす」と申す「しりや」の國の山男でおぢやる。ちかごろふつと惡魔の下部と相成つて、はるばるこの「えじつと」の沙漠まで參つたれど、惡魔も御主「えす・きりしと」とやらんの御威光には叶ひ難く、それがし一人を殘し置いて、いづくともなく逐天致いた。自體それがしは今天が下に並びない大剛の者を尋ね出いて、その身内に仕へようずる志がおぢやるによつて、何とぞこれより後は不

束ながら、御主「えす・きりしと」の下部の數へ御加へ下されい」と云うた。隱者の翁はこれを聞くと、あばら家の門に佇みながら、俄に眉をひそめて答へたは、

「はてさて、せんない仕宜になられたものかな。總じて惡魔の下部となつたものは、枯木に薔薇の花が咲かうずるまで、御主「えす・きりしと」に知遇し奉る時はござない」とあつたに、「れぷろぼす」は又ねんごろに頭を下げて、

「たとへ幾千歳を經ようずるとも、それがしは初一念を貫かうずと決定致いた。さればまづ御主「えす・きりしと」の御意に叶ふべい仕業の段々を敎へられい」と申した。所で隱者の翁と山男との間には、かやうな問答がしかつめらしうとり交されたと申す事でおぢやる。

「ごへんは御經の文句を心得られたか。」

「生憎一字半句の心得もござない。」

「ならば斷食は出來申さうず。」

「如何なこと、それがしは聞えた大飯食ひでおぢやる。中々斷食などはなるまじい。」

「難儀かな。夜もすがら眠らいで居る事は如何あらう。」

「如何なこと、それがしは聞えた大寢坊でおぢやる。中々眠らいでは居られまじい。」

それにはさすがの隱者の翁も、ほとほと言のつぎ穗さへおぢやらなんだが、やがて掌をはたと打つて、したり顏に申したは、

「ここを南に去ること一里がほどに、流沙河と申す大河がおぢやる。この河は水嵩も多く、流れも矢を射る如くぢやによつて、日頃から人馬の渡りに難儀致すとか承つた。なれどごへんほどの大男には、容易く徒渉りさへならうずる。さればごへんはこれよりこの河の渡し守となつて、往來の諸人を渡させられい。おのれ人に篤ければ、天主も亦おのれに篤からう道理ぢや。」とあつたに、大男は大いに勇み立つて、

「如何にも、その流沙河とやらの渡し守になり申さうずる」と云うた。ぢやによつて隱者の翁も、「れぷろぼす」が殊勝な志をことの外悅んで、

「然らば唯今、御水を授け申さうずる」とあつて、おのれは水瓶をかい抱きながら、もそもそと藁家の棟へ這ひ上つて、漸く山男の頭の上へその水瓶の水を注ぎ下いた。ここに不思議がおぢやつたと申すは、得度の御儀式が終りも果てず、折からさし上つた日輪の爛々と輝いた眞唯中から、何やら雲氣がたなびいたかと思へば、忽ちそれが數限りもない四十雀の群となつて、空に聳えた「れぷろぼす」が叢ほどな頭の上へ、ばら〳〵と舞ひ下つたことぢや。この不思議を見た隱者の翁は、思はず御水を授けようず方角さへも忘れはて〻、うつとり朝日を仰いで居つたが、やがて恭しく天上を伏し拜むと、家の棟から「れぷろぼす」をさし招いて、

「勿體なくも御水を頂かれた上からは、向後「れぷろぼす」を改めて、「きりしとほろ」と名のらせられい。思ふに天主もごへんの信心を深う嘉させ給ふと見えたれば、萬一勤行に懈怠あるまじいに於ては、必定遠からず御主「えす・きりしと」の御尊體をも拜み奉らうずる。」と云うた。さて「きりしとほろ」と名を改めた「れぷろぼす」

が、その後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一條を知らうず方々はまづ次のくだりを讀ませられい。

四　往生のこと

さるほどに「きりしとほろ」は隱者の翁に別れを告げて、流沙河のほとりに參つたれば、まことに濁流滾々として、岸べの青蘆を戰がせながら、百里の波を翻すありさまは、容易く舟さへえ通ふまじい。なれど山男は身の丈凡そ三丈あまりもおぢやるほどに、河の眞唯中を越す時さへ、水は僅に臍のあたりを渦卷きながら流れるばかりぢや。されば「きりしとほろ」はこの河べに、さ〻やかながら庵を結んで、時折渡りに難むと見えた旅人の影が眼に觸れ〻ば、すぐさまそのほとりへ歩み寄つて、「これはこの流沙河の渡し守でおぢやる」と申し入れた。もとより並々の旅人は、山男の恐しげな姿を見ると、如何なる天魔波旬かと始は膽も消いて逃げのいたが、

やがてその心根のやさしさもとくと合點行つて、「然らば御世話に相成らうず」と、おづ〳〵「きりしとほろ」の背にのぼるが常ぢや。所で「きりしとほろ」は旅人を肩へゆり上げると、何時も汀の柳を根こぎにした、したたかな杖をつき立てながら、逆巻く流れをことゝもせず、ざんざざんざと水を分けて、難なく向うの岸へ渡いた。しかもあの四十雀は、その間さへ何羽となく、さながら楊花の飛びちるやうに、絶えず「きりしとほろ」の頭をめぐつて、嬉しげに囀り交いたと申す。まことや「きりしとほろ」が信心の辱さには、無心の小鳥も隨喜の思にえ堪えなんだのでおぢやらうず。

かやう致いて「きりしとほろ」は、雨風も厭はず三年が間、渡し守の役目を勤めて居つたが、渡りを尋ねる旅人の數は多うても、御主「えす・きりしと」らしい御姿には、絶えて一度も知遇せなんだ。が、その三年目の或夜のこと、折から凄じい嵐があつて、神鳴りさへおどろと鳴り渡つたに、山男は四十雀と庵を守つて、すぎこし方のことゞもを夢のやうに思ひめぐらいて居つたれば、忽ち車軸を流す雨を壓して、いたいけな聲が響いたは、

「如何に渡し守はおりやるまいか。その河一つ渡して給はれい。」と、聞え渡つた。されば「きりしとほろ」は身を起いて、外の闇夜へ搖ぎ出いたに、如何なこと、河のほとりには、年の頃もまだ十には足るまじい、みめ清らかな白衣のわらんべが、空をつんざいて飛ぶ稻妻の中に、頭を低れて唯ひとり、佇んで居つたではおぢやるまいか。山男は稀有の思をないて、千引の巖にも劣るまじい大の體をかゞめながら、慰めるやうに問ひ尋ねたは、

「おぬしは何としてかやうな夜更けをひとり歩くぞ」と申したに、わらんべは悲しげな瞳をあげて、

「われらが父のもとへ歸らうとて」と、もの思はしげな聲で返答した。もとより「きりしとほろ」はこの答を聞いても、一向不審は晴れなんだか、何やらその渡りを急

ぐ容子があはれにやさしく覺えたによつて、

「然ちば念無う渡さうずる」と、雙手にわらんべをかい抱いて、日頃の如く肩へのせると、例の太杖をてうとついて、岸べの青蘆を押し分けながら、嵐に狂ふ夜河の中へ、膽太くもざんぶと身を浸いた。が、風は黑雲を卷き落いて、息もつかすまじいと吹きどよもす。雨も川面を射白まいて、底にも徹らうずばかり降り注いだ。時折闇をかい破る稻妻の光に見てあれば、浪は一面に湧き立ち返つて、宙に舞上る水煙も、さながら無數の天使たちが雪の翼をはためかいて、飛びしきるかとも思ふばかりぢや。さればさすがの「きりしとほろ」も、今宵はほとほと渡りなやんで、太杖にしかとすがりながら、礎の朽ちた塔のやうに、幾度もゆらゆらと立ちすくんだが、雨風よりも更に難儀だつたは、怪からず肩のわらんべが次第に重うなつたことでおぢやる。始はそれもさばかりに、え堪えまじいとは覺えなんだが、やがて河の眞唯中へさしかかつたと思ふほどに、白衣のわらべが重みは愈增いて、今は枱も大磐石

を負ひないてゐるかと疑はれた。所で遂には「きりしとほろ」も、あまりの重さに壓し伏されて、所詮はこの流沙河に命を殞すべいと覺悟したが、ふと耳にはいつて來たは、例の聞き慣れた四十雀の聲ぢや。はてこの闇夜に何として、小鳥が飛ばうぞと訝りながら、頭を擡げて空を見たれば、不思議やわらんべの面をめぐつて、三日月ほどな金光が燧爛と圓く輝いたに、、四十雀はみな嵐をものともせず、その金光のほとりに近く、紛々と躍り狂つて居つた。これを見た山男は、小鳥さへかくは雄々しいに、おのれは人間と生まれながら、なじかは三年の勤行を一夜に捨つべいと思ひつらう。あの葡萄蔓にも紛はうず髪をさつさつと空を吹き亂いて、寄せては返す荒波に乳のあたりまで洗はせながら、太杖も折れよとつき固めて、必死に目ざす岸へと急いだ。

それが凡そ一時あまり、四苦八苦の内に續いたでおぢやらう。「きりしとほろ」は漸く向うの岸へ、戰ひ疲れた獅子王のけしきで、喘ぎ々よろめき上ると、柳の太

杖を砂にさいて、肩のわらんべを抱き下しながら、吐息をついて申したは、「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海山量り知れまじいぞ」とあつたに、わらんべはにつこと微笑んで、頭上の金光を嵐の中に一きは燧然ときらめかいながら、山男の顔を仰ぎ見て、さも懐しげに答へたは、

「さもあらうず。おぬしは今宵と云ふ今宵こそ、世界の苦しみを身に荷うた「えす」きりしと」を負ひないたのぢや」と、鈴を振るやうな聲で申した。……

その夜この方流沙河のほとりには、あの渡し守の山岸がむくつけい姿を見せずなつた。唯後に殘つたは、向うの岸の砂にさいた、したたかな柳の太杖で、これには枯れ枯れな幹のまはりに、不思議や麗しい紅の薔薇の花が、薫しく咲き誇つて居つたと申す。されば馬太の御經にも記いた如く「心の貧しいものは仕合せぢや。一定天國はその人のものとならうずる。」

枯野抄

丈草、去來を召し、昨夜目のあはざるさま、ふと案じ入りて、呑舟に書かせたり、おのおの咏じたまへ

旅に病むで夢は枯野をかけめぐる

——花屋日記——

元祿七年十月十二日の午後である。一しきり赤々と朝燒けた空は、又昨日のやうに時雨れるかと、大阪商人の寢起の眼を、遠い瓦屋根の向うに誘つたが、幸葉をふるつた柳の梢を、煙らせる程の雨もなく、やがて曇りながら　うす明い、もの靜な冬の晝になつた。立ちならんだ町家の間を、流れるともなく流れる川の水さへ、今日はぼんやりと光澤を消して、その水に浮く葱の屑も、氣のせゐか青い色が冷たくな

い。まして岸を行く往來の人々は、丸頭巾をかぶつたのも、革足袋をはいたのも、皆風の吹く世の中を忘れたやうに、うつそりとして歩いて行く。暖簾の色、車の行きかひ、人形芝居の遠い三味線の音——すべてがうす明い、もの靜な冬の晝を、橋の擬寶珠に置く町の埃も、動かさない位、ひつそりと守つてゐる……

この時、御堂前南久太郎町、花屋仁左衞門の裏座敷では、當時俳諧の大宗匠と仰がれた芭蕉庵松尾桃青が、四方から集つて來た門下の人々に介抱されながら、五十一歳を一期として、埋火のあたたまりの冷むるが如く、靜に息を引きとらうとしてゐた。時刻は凡そ、申の中刻にも近からうか。——隔ての襖をとり拂つた、だだつ廣い座敷の中には、枕頭に炷きさした香の煙が、一すぢ昇つて、天下の冬を庭さきに堰いた、新しい障子の色も、ここばかりは暗くかげりながら、身にしみるやうに冷々する。その障子の方を枕にして、寂然と横はつた芭蕉のまはりには、先、醫者の木節が、夜具の下から手を入れて、間遠い脈を守りながら、浮かない眉をひそめ

てゐた。その後に居すくまつて、さつきから小聲の稱名を絶たないのは、今度伊賀から伴に立つて來た、老僕の治郎兵衛に違ひない。と思ふと又、木節の隣には、誰の眼にもそれと知れる、大兵肥滿の晉子其角が、紬の角通しの懷を鷹揚にふくらませて、憲法小紋の肩をそば立てた、ものごしの凛々しい去來と一しよに、ぢつと師匠の容態を窺つてゐる。それら其角の後には、法師じみた丈草が、手くびに菩提樹の珠數をかけて、端然と控へてゐたが、隣に座を占めた乙州の、絶えず鼻を啜つてゐるのは、もうこみ上げて來る悲しさに、堪へれらなくなつたからであらう。その容子をぢろぢろ眺めながら、古法衣の袖をかきつくろつて、無愛想な頤をそらせてゐる、背の低い僧形は惟然坊で、これは色の淺黑い、剛愎さうな支考と肩をならべて、木節の向うに坐つてゐた。あとは唯、何人かの弟子たちが皆息もしないやうに靜まり返つて、或は右、或は左と、師匠の床を圍みながら、限りない死別の名ごりを惜しんでゐる。が、その中でもたつた一人、座敷の隅に蹲つて、ぴつたり疊にひ

れ伏した儘、慟哭の聲を洩してゐたのは、正秀ではないかと思はれる。しかしこれさへ、座敷の中のうすら寒い沈默に抑へられて、枕頭の香のかすかな匂を、援す程の聲も立てない。

芭蕉はさつき、痰喘にかすれた聲で、覺束ない遺言をした後は、半ば眼を見開いた儘、昏睡の狀態にはいつたらしい。うす痘痕のある顏は、顴骨ばかり露に瘦せ細つて、皺に圍まれた脣にも、とうに血の氣はなくなつてしまつた。殊に傷しいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮べながら、まるで屋根の向うにある、際限ない寒空でも望むやうに、徒に遠い所を見やつてゐる。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。」——事によるとこの時、このとりとめのない視線の中には、三四日前に彼自身が、その辭世の句に詠じた通り、茫々とした枯野の暮色が、一痕の月の光もなく、夢のやうに漂つてでもゐたのかも知れない。

「水を。」

木節はやがてかう云つて、靜に後にゐる治郎兵衞を顧みた。一椀の水と一本の羽根揚子とは、既にこの老僕が、用意して置いた所である。彼はその二品をおづおづ主人の枕元へ押し並べると、思ひ出したやうに又、口を早めて、專念に稱名を唱へ始めた。治郎兵衞の素朴な、山家育ちの心には、芭蕉にせよ、誰にもせよ、ひとしく彼岸に往生するのなら、ひとしく又、彌陀の慈悲にすがるべき筈だと云ふ、堅い信念が根を張つてゐたからであらう。

一方又木節は、「水を」と云つた刹那の間、果して自分は醫師として、萬方を盡したらうかと云ふ、何時もの疑惑に遭遇したが、すぐに又自ら勵ますやうな心もちになつて、隣にゐた其角の方をふりむきながら、無言の儘、ちよいと相圖をした。芭蕉の床を圍んでゐた一同の心に、愈と云ふ緊張した感じが咄嗟に閃いたのはこの時である。が、その緊張した感じと前後して、一種の弛緩した感じが――云はば、來る可きものが遂に來たと云ふ、安心に似た心もちが、通りすぎた事も亦爭はれない。

唯、この安心に似た心もちは、誰もその意識の存在を肯定しようとはしなかつた程、微妙な性質のものであつたからか、現にこゝにゐる一同の中では、最も現實的な其角でさへ、折から顏を見合せた木節と、際どく相手の眼の中に、同じ心もちを讀み合つた時は、流石にぎよつとせずにはゐられなかつたのであらう。彼は慌しく視線を側へ外らせると、さり氣なく羽根楊子をとりあげて、

「では、御先へ」と、隣の去來に挨拶した。さうしてその羽根楊子へ湯呑の水をひたしながら、厚い膝をにじらせて、そつと今はの師匠の顏をのぞきこんだ。實を云ふと彼は、かうなるまでに、師匠と今生の別をつげると云ふ事は、さぞ悲しいものであらう位な、豫測めいた考もなかつた譯ではない。が、かうして愈末期の水をとつて見ると、自分の實際の心もちは全然その芝居めいた豫測を裏切つて、如何にも冷淡に澄みわたつてゐる。のみならず、更に其角が意外だつた事には、文字通り骨と皮ばかりに痩せ衰へた、致死期の師匠の不氣味な姿は、殆面を背けずにはゐられ

なかつた程、烈しい嫌悪の情を彼に起させた。いや、單に烈しいと云つたのでは、まだ十分な表現ではない。それは恰も目に見えない毒物のやうに、生理的な作用さへも及ぼして來る、最も堪へ難い種類の嫌悪であつた。彼はこの時、偶然な契機によつて、醜き一切に對する反感を師匠の病軀の上に洩らしたのであらうか。或は又「生」の享樂家たる彼にとつて、そこに象徴された「死」の事實が、この上もなく呪ふ可き自然の威嚇だつたのであらうか。——兎に角、垂死の芭蕉の顏に、云ひやうのない不快を感じた其角は、殆何の悲しみもなく、その紫がかつたうすい脣に、一刷毛の水を塗るや否や、顏をしかめて引き下つた。尤も引き下る時に、自責に似た一種の心もちが、刹那に彼の心をかすめもしたが、彼のさきに感じてゐた嫌悪の情は、さう云ふ道德感に顧慮すべく、餘り强烈だつたものらしい。

其角に次いで羽根楊子をとり上げたのは、さつき木節が相圖をした時から、既に心の落着きを失つてゐるらしい去來である。日頃から恭謙の名を得てゐた彼は、一

同に輕く會釋をして、芭匠の枕もとへすりよつたが、そこに横はつてゐる老俳諧師の病みほうけた顏を眺めると、或滿足と悔恨との不思議に錯雜した心もちを、嫌でも味はなければならなかつた。しかもその滿足と悔恨とは、まるで陰と日向のやうに、離れられない因緣を背負つて、實はこの四五日以前から、絕えず小心な彼の氣分を搔亂してゐたのである。と云ふのは、師匠の重病だと知らせを聞くや否や、すぐに伏見から船に乘つて、深夜にもかまはず、この花屋の門を叩いて以來、彼は師匠の看病を一日も忘つたと云ふ事はない。その上之道に賴みこんで手傳ひの周旋を引き受けさせるやら、住吉大明神へ人を立てゝ病氣本復を祈らせるやら、或は又花屋仁左衞門に相談して調度類の買入れをして貰ふやら、殆彼一人が車輪になつて、萬事萬端の世話を燒いた。それは勿論去來自身進んで事に當つたので、誰に恩を着せようと云ふ氣も、皆無だつた事は事實である。が、一身を擧げて師匠の介抱に沒頭したと云ふ自覺は、勢、彼の心の底に大きな滿足の種を蒔いた。それが唯、意識

せられざる滿足として、彼の活動の背景に暖い心もちをひろげてゐた中は、元より彼も行住坐臥に、何等のこだはりを感じなかつたらしい。さもなければ夜伽の行燈の光の下で、支考と浮世話に耽つてゐる際にも、故に孝道の義を釋いて、自分が師匠に仕へるのは親に仕へる心算だなどゝ、長々しい述懷はしなかつたであらう。

しかしその時、得意な彼は、人の惡い支考の顏に、ちらりと閃いた苦笑を見ると、急に今までの心の調和に狂ひの出來た事を意識した。さうしてその狂ひの原因は、始めて氣のついた自分の滿足と、その滿足に對する自己批評とに存してゐる事を發見した。明日にもわからない大病の師匠を看護しながら、その容態をでも心配する事が、徒に自分の骨折ぶりを滿足の眼で眺めてゐる。――これは確に、彼の如き正直者の身にとつて、自ら疚しい心もちだつたのに違ひない。それ以來去來は何をするのにも、この滿足と悔恨との扞格から、自然と或程度の掣肘を感じ出した。將に支考の眼の中に、偶然でも微笑の顏が見える時は、反つてその滿足の自覺なるもの

が、一層明白に意識されて、その結果愈自分の卑しさを情なく思つた事も度々ある。それが何日か續いた今日、かうして師匠の枕もとで、末期の水を供する段になると、道德的に潔癖な、しかも存外神經の纖弱な彼が、かう云ふ內心の矛盾の前に、全然落着きを失つたのは、氣の毒ではあるが無理もない。だから去來は羽根楊子をとり上げると、妙に磴中が固くなつて、その水を含んだ白い先も、芭蕉の脣を撫でながら、頻にふるへてゐた位、異常な興奮に襲はれた。が、幸、それと共に、彼の睫毛に溢れようとしてゐた、涙の珠もあつたので、彼を見てゐた門弟たちは、恐くあの辛辣な支考まで、全くこの興奮も彼の悲しみの結果だと解釋してゐた事であらう。

やがて去來が又憲法小紋の肩をそば立てゝ、おづおづ席に復すると、羽根楊子はその後にゐた丈艸の手へわたされた。日頃から老實な彼が、つゝましく伏眼になつて、何やらかすかに口の中で誦しながら、靜に師匠の脣を沾してゐる姿は、恐らく誰の見た眼にも嚴だつたのに相違ない。が、この嚴な瞬間に突然座敷の片すみから

は、不氣味な笑ひ聲が聞え出した。いや、少くともその時は、聞え出したと思はれたのである。それはまるで腹の底からこみ上げて來る哄笑が、喉と脣とに堰かれながら、しかも猶可笑しさに堪へ兼ねで、ちぎれちぎれに鼻の孔から、迸つて來るやうな聲であつた。が、云ふまでもなく、誰もこの場合、笑を失したものがあつた譯ではない。聲は實にさつきから、涙にくれてゐた正秀の抑へに抑へてゐた慟哭が、この時胸を裂いて溢れたのである。その慟哭は勿論、悲愴を極めてゐたのに相違なかつた。或はそこにゐた門弟の中には、「塚も動けわが泣く聲は秋の風」と云ふ、師匠の名句を思ひ出したものも、少くはなかつた事であらう。が、その凄絶なる可き慟哭にも、同じく涙に咽ばうとしてゐた乙州は、その中にある一種の誇張に對して、——と云ふのが穩でないならば、慟哭を抑制すべき意志力の缺乏に對して、多少不快を感じずにはゐられなかつた。唯、さう云ふ不快の性質が、どこまでも智的なものに過ぎなかつたのであらう。彼の頭が否と云つてゐるにも關らず、彼の心臓は忽

ち正秀の哀慟の聲に動かされて、何時か眼の中は涙で一ぱいになつた。が、彼が正秀の慟哭を不快に思ひ、惹いては彼自身の涙をも潔しとしない事は、さつきと少しも變りはない。しかも涙は益眼に溢れて來る——乙州は遂に兩手を膝の上についた儘、思はず嗚咽の聲を發してしまつた。が、この時歔欷するらしいけはひを洩らしたのは、獨り乙州ばかりではない。芭蕉の床の裾の方に控へてゐた、何人かの弟子の中からは、それと殆同時に涕をすゝる聲が、しめやかに冴えた座敷の空氣をふるはせて、斷續しながら聞え始めた。

その惻々として悲しい聲の中に、菩提樹の念珠を手頸にかけた丈艸は、元の如く靜に席へ返つて、あとには其角や去來と向ひあつてゐる、支考が枕もとへ進みよつた。が、この皮肉屋を以て知られた東花坊には周圍の感情に誘ひこまれて、徒に涙を落すやうな纖弱な神經はなかつたらしい。彼は何時もの通り淺黑い顏に、何時もの通り人を莫迦にしたやうな容子を浮べて、更に又何時もの通り妙に横風に構へな

がら、無造作に師匠の脣へ水を塗つた。しかし彼と雖もこの場合、勿論多少の感慨があつた事は爭はれない。「野ざらしを心に風のしむ身かな」――師匠は四五日前に、「かねては草を敷き、土を枕にして死ぬ自分と思つたが、かう云ふ美しい蒲團の上で、往生の素懐を遂げる事が出來るのは、何よりも悦ばしい」と繰返して自分たちに、禮を云はれた事がある。が、實は枯野のただ中も、この花屋の裏座敷も、大した相違がある譯ではない。現にかうして口をしめしてゐる自分にしても、三四日前までは、師匠に辭世の句がないのを氣にかけてゐた、それから昨日は、師匠の發句を滅後に一集する計畫を立てゐた。最後に今日は、たつた今まで、刻々臨終に近づいて行く師匠を、どこかその經過に興味でもあるやうな、顧察的な眼で眺めてゐた。もう一度進めて皮肉に考へれば、事によるとその眺め方の背後には、他日自分の筆によつて書かるべき終焉記の一節さへ、豫想されてゐなかつたとは云へない。して見れば師匠の命終に侍しながら、自分の頭を支配してゐるものは、他門への名聞門弟た

ちの利害、或は又自分一身の興味打算――皆直接垂死の師匠とは、關係のない事はかりである。だが、師匠はやはり發句の中で、屢豫想を逞くした通り、限りない人生の枯野の中で、野ざらしになつたと云つて差支へない。自分たち門弟は皆師匠の最後を悼まずに、師匠を失つた自分たち自身を悼んでゐる。枯野に窮死した先達を歎かずに、薄暮に先達を失つた自分たち自身を歎いてゐる。が、それを道德的に非難して見た所で、本來薄情に出來上つた自分たち人間をどうしよう。――かう云ふ厭世的な感慨に沈みながら、しかもそれに沈み得る事を得意にしてゐた支考は、師匠の唇をしめし終つて、羽根楊子を元の湯呑へ返すと、涙に咽んでゐる門弟たちを、嘲るやうにじろりと見廻して、徐に又自分の席へ立ち戻つた。人の好い去來の如きは、始からその冷然とした態度に中てられて、さつきの不安を今更のやうに又新にしたが、獨り其角が妙に擽つたい顔をしてゐたのは、どこまでも白眼で押し通さうとする、東花坊のこの性行上の習氣を、小うるさく感じてゐたらしい。

支考に續いて維然坊が、黒染の法衣の裾をもそりと疊へひきながら、小さく這ひ出した時分には、芭蕉の斷末魔は既にもう、彈指の間に迫つたのであらう。顏の色は前よりも更に血の氣を失つて、水に濡れた脣の間からも、時々忘れたやうに息が洩れなくなる。と思ふと又、思ひ出したやうにぎくりと喉が大きく動いて、力のない空氣が通ひ始める。しかもその喉の奥の方で、かすかに二三度痰が鳴つた。呼吸も次第に靜になるらしい。その時羽根楊子の白い先を、將にその脣へ當てようとしてゐた惟然坊は、急に死別の悲しさとは緣のない、或る恐怖に襲はれ始めた。それは師匠の次に死ぬものは、この自分ではあるまいかと云ふ、殆無理由に近い恐怖である。が、無理由であればあるだけに、一度この恐怖に襲はれ出すと、我慢にも抵抗のしようがない。元來彼は死と云ふと、病的に驚悸する種類の人間で、昔からよく自分の死ぬ事を考へると、風流の行脚をしてゐる時でも、總身に汗の流れるやうな不氣味な恐しさを經驗した。從つて又、自分以外の人間が、死んだと云ふ事を耳

にすると、まあ自分が死ぬのではなくつてよかつたと、安心したやうな心もちになる。と同時に又、もし自分が死ぬのだつたらどうだらうと、反對の不安をも感じる事がある、これはやはり芭蕉の場合も例外には洩れないで、始まだ彼の臨終がこれ程切迫してゐない中は、――障子に冬晴の日がさして、園女の贈つた水仙が、清らかな匂を流すやうになると、一同師匠の枕もとに集つて、病間を慰める句作などをした時分は、さう云ふ明暗二通りの心もちの間を、その時次第で徘徊してゐた。が、次第にその終焉が近づいて來ると――忘れもしない初時雨の日に、自ら好んだ梨の實さへ、師匠の食べられない容子を見て、心配さうに木節が首を傾けた、あの頃から安心は追々不安にまきこまれて、最後にはその不安さへ、今度死ぬのは自分かも知れないと云ふ險惡な恐怖の影を、うすら寒く心の上にひろげるやうになつたのである。だから彼は枕もとへ坐つて、刻銘に師匠の脣をしめしてゐる間中、この恐怖に祟られて、殆末期の芭蕉の顏を正視する事が出來なかつたらしい。いや、一度は

正視したかとも思はれるが、丁度その時芭蕉の喉の中では、痰のつまる音がかすかに聞えたので、折角の彼の勇氣も、途中で挫折してしまつたのであらう。「師匠の次に死ぬものは、事によると自分かも知れない」――絶えずかう云ふ豫感めいた聲を、耳の底に聞いてゐた惟然坊は、小さな體をすくませながら、自分の席へ返つた後も、無愛想な顔を一層無愛想にして、なる可く誰の顔も見ないやうに、上眼ばかり使つてゐた。

續いて乙州、正秀、之道、木節と、病床を圍んでゐた門人たちは、順々に師匠の脣を沾した。が、その間に芭蕉の呼吸は、一息毎に細くなつて、數さへ次第に減じて行く。喉も、もう今では動かない。うす痘痕の淫んでゐる、どこか蠟のやうな小さい顔、遙な空間を見据えてゐる、光の褪せた瞳の色、さうして額にのびてゐる、銀のやうな白い鬚――それが皆人情の冷さに凍てついて、やがて赴くべき寂光土を、ぢつと夢みてゐるやうに思はれる。するとこの時、去來の後の席に、默然と頭を垂

れてゐた丈艸は、あの老實な禪客の丈艸は、芭蕉の呼吸のかすかになるのに從つて、限りない悲しみと、さうして又限りない安らかな心もちとが、徐に心の中へ流れこんで來るのを感じ出した。悲しみは元より說明を費すまでもない。が、その安らかな心もちは、恰も明方の寒い光が次第に暗の中にひろがるやうな、不思議に朗な心もちである。しかもそれは刻々に、あらゆる雜念を溺し去つて、果ては涙そのものさへも、毫も心を刺す痛みのない、淸らかな悲しみに化してしまふ。彼は師匠の魂が虛夢の生死を超越して、常住涅槃の寶土に還つたのを喜んででもゐるのであらうか。いや、これは彼自身にも、肯定の出來ない理由であつた。それならば――ああ、誰か徒に踏跚逡巡して、己を欺くの愚を敢てしよう。丈艸のこの安らかな心もちは久しく芭蕉の人格的壓力の桎梏に、空しく屈してゐた彼の自由な精神が、その本來の力を以て、漸く手足を伸ばさうとする、解放の喜びだつたのである。彼はこの恍惚たる悲しい喜びの中に、菩提樹の念珠をつまぐりながら、周圍にすすりなく門弟

たちち、眼底を拂つて去つた如く、脣頭にかすかな笑を浮べて、恭しく臨終の芭蕉に禮拜した。——

かうして、古今に倫を絶した俳諧の大宗匠、芭蕉庵松尾桃青は、「悲歎かぎりなき」門弟に圍まれた儘、溘然として屬纊に就いたのである。

龍

一

宇治の大納言隆國「やれ、やれ、晝寢の夢が覺めて見れば、今日は又一段と暑いやうぢや。あの松ヶ枝の藤の花さへ、ゆさりとさせる程の風も吹かぬ。何時もは凉しう聞える泉の音も、どうやら油蟬の聲にまぎれて、反つて暑苦しうなつてしまうた。どれ、又童部たちに煽いででも貰はうか。

「何、往來のものどもが集つた？　ではそちらへ參ると致さう。童部たちもその大團扇を忘れずに後からかついで參れ。

「やあ、皆のもの、予が隆國ぢや。大肌ぬぎの無禮は赦してくれい。

「さて今日はその方どもにちと頼みたい事があつて、わざと、この宇治の亭へ足を止めて貰うたのぢや。と申すはこの頃ふとここへ參つて、予も人並に双紙を一つ綴らうと思ひ立つたが、つらつら獨り考へて見れば、生憎予はこれと云うて、筆にする程の話も知らぬ。さりながらあだ面倒な趣向などを凝すのも、予のやうな怠けものには、何より臆劫千萬ぢや。就いては今日から往來のその方どもに、今は昔の物語を一つづつ聞かせて貰うて、それを双紙に編みなさうと思ふ。さすれば内裡の内外ばかりうろついて居る予などには、思ひもよらぬ逸事奇聞が、舟にも載せ車にも積む程、四方から集つて參るに相違あるまい。何と、皆のもの、迷惑ながらこの所望を叶へてくれる譯には行くまいか。

「何、叶へてくれる？　それは重疊、では早速一同の話を順々にこれで聞くと致さう。

「こりや童部たち、一座へ風が通ふやうに、その大團扇で煽いでくれい。それで少

しは涼しくもならうと申すものぢや。鑄物師も陶器造も遠慮は入らぬ、二人ともずつとこの机のほとりへ參れ。鮮賣の女も日が近くば、桶はその緣の隅へ置いたが好いぞ。わ法師も金皷を外したらどうぢや。そこな侍も山伏も簞を敷いたらうな。

「よいか、支度が整うたら、まづ第一に年かさな陶器造の翁から、何なりとも話してくれい。」

二

翁「これは、これは、御叮嚀な御挨拶で、下賤な私どもの申し上げます話を、一々双紙に書いてやらうと仰有います——そればかりでも、私の身にとりまして、どの位恐多いかわかりません。が、御辭退申しましては、反つて御意に逆ふ道理でございますから、御免を蒙つて一通り、多暖もない昔話を申し上げると致しませう。どうか御體屈でも暫くの間、御耳を御借し下さいまし。

「私どものまだ年若な時分、奈良に藏人得業惠印と申しまして、途方もなく鼻の大きい法師が一人居りました。しかもその鼻の先が、まるで蜂にでも刺されたかと思ふ位、年が年中恐しくまつ赤なのでございます。そこで奈良の町のものが、これに渾名をつけまして、鼻藏——と申しますのは、元來大鼻の藏人得業と呼ばれたのでございますが、それではちと長すぎると申しますので、やがて誰云ふとなく鼻藏人と申し囃しました。が、暫く致しますと、それでもまだ長いと鼻しますので、さてこそ鼻藏々々と、諡はれるやうになつたのでございます。現に私も一兩度、その頃奈良の興福寺の寺内で見かけた事がございますが、いかさま鼻藏とでも譏られさうな、世にも見事な赤鼻の天狗鼻でございました。その鼻藏の、大鼻の藏人得業の惠印法師が、或夜の事、弟子もつれずに唯一人そつと猿澤の池のほりへ參りまして、あの采女柳の前の堤へ「三月三日この池より龍昇らんづるなり」と筆太に書いた建札を、高々と一本打ちました。けれども惠印は實の所、猿澤の池に龍などがほんと

うに住んでゐたかどうか、心得てゐた譯ではございません。ましてその龍が三月三日に天上すると申す事は、全く口から出まかせの法螺なのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方が確だつたでございませう。ではどうしてそんな入らざる眞似を、致したかと申しますと、惠印は日頃から奈良の僧俗が何かにつけて自分の事を笑ひものにするのが不平なので、今度こそこの鼻藏人がうまく一番かついだ揚句、さんざん笑ひ返へしてやらうと、かう云ふ魂膽で惡戯にとりかかつたのでございます。御前などが御聞きになりましたら、嘸笑止な事と思召しませうが、何分今は昔の御話で、その頃はかやうな惡戯を致しますものが、兎角どこにもあり勝ちでございました。

「さてあくる日、第一にこの建札を見つけましたのは、毎朝興福寺の如來樣を拜みに參ります婆さんで、これが珠數をかけた手に竹杖をせつせつと立てながら、まだ靄のかかつてゐる池のほとりへ來かかりますと、昨日までなかつた建札が、采女柳

の下に立つて居ります。はて法會の建札にしては妙な所に立つてゐるなと不審には思つたのでございますが、何分字文が讀めませんので、その儘通りすぎやうと致しました時、折よく向うから偏衫を着た法師が一人、通りがかつたものでございますから、賴んで讀んで貰ひますと、何しろ「三月三日この池より龍昇らんずるなり」で、――誰でもこれには驚いたでございませう。其婆さんも呆氣にとられて、曲つた腰をのしながら、「此池に龍などが居りませうかいな」と、とぼんと法師の顏を見上げますと、法師は反つて落ち着き拂つて、「昔、唐の或學者が眉の上に瘤が出來て、痒うてたまらなんだ事があるが、或日一天俄に搔き曇つて、雷雨車軸を流すが如く降り注いだと見てあれば、忽ちその瘤がふつつと裂けて、中から一匹の高龍が雲を捲いて一文字に昇天したと云ふ話もござる。瘤の中にさへ龍が居たなら、まして一程の池の底には、何十匹となく蛟龍毒蛇が蟠つて居ようも知れぬ道理ぢや。」と、說法したさうでございます。何しろ出家に妄語はないと日頃から思ひこんだ婆

さんの事でございますから、これを聞いて肝を消しますまい事か、「成程さう承りますれば、どうやらあの邊の水の色が怪しいやうに見えますわいな」と、まだ三月三日にもなりませんのに、法師を獨り後に殘して、喘ぎ喘ぎ念佛を申しながら、竹杖をつく間もまだるこしさうに急いで逃げてしまひました。後で人目がございませんでしたら、腹を抱へたかつたのは此法師で――これはさうでございませう。實はあの發頭人の得業惠印、渾名は鼻藏が、もう昨夜建てた高札にひつかかつた烏がありさうだ位な、甚怪しからん量見で、容子を見ながら、池のほとりを、歩いて居つたのでございますから。が、婆さんの行つた後には、もう早立ちの旅人と見えて、伴の下人に荷を負はせたの蟲垂衣の女が一人、市女笠の下から建札を讀んで居るのでございます。そこで惠印は大事をとつて、一生懸命笑を蟲み殺しながら、自分の建札の前に立つて一應讀むやうなふりをすると、あの大鼻の赤鼻をさも不思議さうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺の方へ引返して參りました。

「すると興福寺の南大門の前で、思ひがけなく顔を合せましたのは、同じ坊に住んで居つた惠門と申す法師でございます。それが惠印に出合ひますと、ふだんから片意地なけじけじ眉をちよいとひそめて「御坊には珍らしい早起きでござるな。これは天氣が變るかも知れませぬぞ。」と申しますから、こちら得たり賢しと鼻を一ぱいにやつきながら、「如何にも天氣位は變るかも知れませぬて。聞けばあの猿澤の池から三月三日には、龍が天上するとか申すではござらぬか。」と、したり顔に答へました。これを聞いた惠門は疑はしさうに、ぢろりと惠印の顔を睨めましたが、すぐに鼻を鳴らしながらせせら笑つて、「御坊は善い夢を見られたな。いやさ、龍の天上するなどと申す夢は吉兆ぢやとか聞いた事がござる。」と、鉢の開いた頭を聳かせた儘、行きすぎようと致しましたが、惠印がまるで獨り言のやうに、「はてさて、緣無き衆生は度し難しぢや」と、呟いた聲でも聞えたのでございませう。麻緒の足駄の齒を拔つて、憎々しげにふり返りますと、まるで法論でもしかけさうな勢で、「それと

も何か龍が天上すると申す、しかとした證據がござるかな」と問ひ詰るのでございます。そこで惠印はわざと悠々と、もう朝日の光がさし始めた池の方を指さしまして、「愚僧の申す事が疑はしければ、あの采女柳の前にある高札を讀まれたがよろしうござらう。」と、見下すやうに答へました。これにはさすがに片意地な惠門も、少しは鋒を折かれたのか、眩しさうな瞬きを一つすると「ははあ、そのやうな高札が建ちましたか。」と氣のない聲で云ひ捨てながら、又てくてく歩き出しましたが、今度は鉢の開いた頭を傾けて、何やら考へて行くらしいのでございます。その後姿を見送つた鼻藏人の可笑しさは、大抵御推察が參りませう。惠印はどうやら赤鼻の奥がむづ痒いやうな心もちがして、しかつめらしく南大門の石段を上つて行く中にも、思はず吹き出さずには居られんませんでした。

「その朝でさへ「三月三日この池より龍昇らんずるなり」の建札は、これ程の利き目がございましたから、まして一日二日と經つて見ますと、奈良の町中どこへ行つ

ても、この猿澤の池の龍の噂が出ない所はございません。元より中には「あの建札も誰かの惡戯であらう」など申すものもございましたが、折から市では神泉苑の龍が天上致したなどと申す評判もございましたので、さう云ふものさへ内心では半信半疑と申しませうか、事によるとそんな大變があるかも知れない位な氣にはなつて居つたのでございます。するとここに又思ひもよらない不思議が起つたと申しますのは、春日の御社に仕へて居ります或禰宜の一人娘で、とつて九つになりますのが、その後十日と經たない中に、或夜母の膝を枕にしてうとうと致して居りますと、天から一匹の黑龍が雲のやうに降つて來て、「わしは愈三月三日に天上する事になつたが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算だから、どうか安心してゐてくれい」と人語を放つて申しました。そこで娘は目がさめると、すぐにこれ〳〵かうそれが町中の大評判になつたではございませんか。かうなると話にも尾鰭がついて、

やれあすこの稚兒にも龍が憑いて歌を詠んだの、やれここの巫女にも龍が現れて託宣をしたのと、まるでその猿澤の池の龍が今にもあの水の上へ、首でも出しさうな騒ぎでございます。いや、首までは出しも致しますまいが、その中に龍の正體を、目のあたりにしかと見とどけたと申す男さへ出て參りました。これは毎朝川魚を市へ賣りに出ます老爺で、その日もまだうす暗いのに猿澤の池へかかりますと、あの采女柳の枝垂れたあたり、建札のある堤の下に漫々と湛へた天明け前の水が、そこだけほんのりとうす明く見えたさうでございます。何分にも龍の噂がやかましい時分でございますから、「さては龍神の御出ましか」と、嬉しいともつかず、恐しいともつかず、唯ぶるぶる胴震ひをしながら、川魚の荷をそこへ置くなり、ぬき足にそつと忍び寄ると、采女柳につかまつて、透かすやうに、池を窺ひました。するとそのほの明い水の底に、黑金の鎖を卷いたやうな何とも知れない怪しい物が、ぢつと蟠(わだかま)つて居りましたが、忽ち人音に驚いたのか、ずるりとそのとぐろをほどきますと、

見る見る池の面に水脈(みを)が立つて、怪しい物の姿はどことも知れず消え失せてしまつたさうでございます。が、これを見ました老爺は、やがて總身に汗をかいて、荷を下した所へ來て見ますと、何時の間にか鯉鮒合せて二十尾(び)もゐた商賣物がなくなつてゐたさうでございますから、「大方劫(こう)を經た獺にでも欺されたのであらう」などと哂ふものもございました。けれども中には「龍王が鎖護遊ばすあの池に獺の棲まう筈もないから、それはきつと龍王が魚鱗(うろこ)の命を御憫みになつて、御自分のいらつしやる池の中へ御召し寄せなすつたのに相違ない。」と申すものも、思ひの外多かつたやうでございます。

「こちらは鼻藏の惠印法師で、「三月三日この池より龍昇らんずるなり」の建札が大評判になるにつけ、内々あの大鼻をうごめかしては、にやにや笑つて居りましたが、やがてその三月三日も四五日の中に迫つて參りますと、驚いた事には攝津の國櫻井にゐる叔母の尼が、是非その龍の昇天を見物したいと申すので、遠い路をはるばる

と上つて參つたではございませんか。これには惠印も當惑して、嚇すやら、賺すやら、いろいろ手を盡して櫻井へ歸つて貰はうと致しましたが、叔母は「わしもこの年ぢやで、龍王の御姿をたつた一目拜みさへすれば、もう往生しても本望ぢや。」と、剛情にも腰を据えて、甥の申す事などには耳を借さうとも致しません。と申してあの建札は自分が惡戯に建てたのだとも、今更白狀する譯には參りませんから、惠印もとうとう我を折つて、三月三日まではその叔母の世話を引き受けたばかりでなく、當日は一しよに龍神の天上する所を見に行くと云ふ約束までもさせられました。さてかうなつて考へますと、叔母の尼さへ龍の事を聞き傳へたのでございますから、大和の國内は申すまでもなく、攝津の國、和泉の國、河内の國を始めとして、事によると播磨の國、山城の國、近江の國、丹波の國のあたりまでも、もう此噂が一圓にひろまつてゐるのでございませう。つまり奈良の老若をかつがうと思つてした惡戯が、思ひもよらず四方の國々で何万人とも知れない人間を瞞す事になつてしまつ

たのでございます。惠印はさう思ひますと、可笑しいよりは何となく空恐しい氣が先に立つて、朝夕叔母の尼の案内がてら、つれ立つて奈良の寺々を見物し歩いて居ります間も、とんと檢非遣使の眼を偸んで、身を隱してゐる罪人のやうな後めたい思ひがして居りました。が、時々往來のものの話などで、あの建札へこの頃は香花が手向けてあると云ふ噂を聞く事もございますと、やはり氣味の惡い一方では、一かど大手柄でも建てたやうな嬉しい氣が致すのでございます。

「其内に追ひ〳〵日數が經つて、とうとう龍の天上する三月三日になつてしまひました。そこで惠印は約束の手前、今更外に致し方もございませんから、澁々叔母の尼の伴をして、猿澤の池が一目に見えるあの興福寺の南大門の石段の上へ參りました。丁度その日は空もほがらかに晴れ渡つて、門の風鐸を鳴らす程の風さへ吹く氣色はございませんでしたが、それでも今日と云ふ今日を待ち兼ねてゐた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、攝津、播磨、山城、近江、丹波の國々からも

押し寄せて參つたのでございませう。石段の上に立つて眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それが又末はほのぼの霞をかけた二條の大路のはてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子の波をずはめかせて居るのでございます。と思ふとそのところどころには、青絲毛だの、赤絲毛だの、或は又桁檀庇だのの數奇を凝らした牛車が、のつしりとあたりの人波を抑へて、屋形に打つた金銀の金具を折からうららかな春の日ざしに、眩ゆ〳〵きらめかせて居りました。その外、日傘をかざすもの、平張りを空に張り渡すもの、或は又仰々しく棧敷を路に連ねるもの——まるで目の下の池のまはりは時ならない加茂の祭でも渡りさうな景色でございます。これを見た惠印法師はまさかあの建札を立てたばかりで、これ程の大騒ぎが始まらうとは夢にも思はずに居りましたから、さも呆れ返つたやうに叔母の尼の方をふり向きますと、「いやはや、飛んでもない人出でござるな」と情けない聲で申したきり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元氣も出ないと見えて、その儘南大門の柱の根が

たへ意氣地なく蹲つてしまひました。

「けれども元より叔母の尼には、惠印のそんな腹の底が呑みこめる譯もございませんから、こちらは頭巾もずり落ちる程一生懸命首を延ばして、あちらこちらを見渡しながら、成程龍神の御棲まひになる池の景色は格別だの、これ程の人出がした上からは、きつと龍神も御姿を御現はしなさるだらうのと、何かと惠印をつかまへて話しかけるのでございます。そこでこちらも柱の根がたに坐つてばかりは居られませんので、嫌々腰を擡げて見ますと、ここにも揉烏帽子や侍烏帽子が人山を築いて居りましたが、その中に交つてあの惠門法師も、相不變鉢の開いた頭を一きは高く聳やかせながら、鵜の目もふらず池の方を眺めて居るではございませんか。惠印は急に今までの情けない氣もちも忘れてしまつて、唯この男さへかついでやつたと云ふ可笑しさに獨り擽られながら、「御坊」と一つ聲をかけて、其から「御坊も龍の天上を御覽かな」とからかふやうに申しましたが、惠印は横柄にふりかへると、思

ひの外眞面目な顔で、「さやうでござる。御同樣大分待ち遠い思ひをしますな」と、例のげじげじ眉も動かさずに答へるのでございます。これはちと藥が利きすぎた――と思ふと、浮いた聲も自然に出なくなつてしまひましたから、惠印は又元の通り世にも心細さうな顔をして、ぼんやり人の海の向うにある猿澤の池を見下しました。

が、池はもう暖んだらしい底先りのする水の面に、堤をめぐつた櫻や柳を鮮にぢつと映した儘、何時になつても龍などを天上させる氣色はございません。殊にそのまはり何里四方が、隙き間もなく見物の人數で埋まつてでもゐるせいか、今日は池の廣さが日頃より一層狹く見えるやうで、第一ここに龍が居ると云ふそれが抑々途方もない嘘のやうな氣が致すのでございます。

「が、一時々々と時の移つて行くのも知らないやうに、見物は皆片唾を飲んで、氣長に龍の天上を待ちかまへて居たのでございませう。門の下の人の海は益々廣がつて行くばかりで、暫くする内には牛車の數も、所によつては車の軸が互に押し合ひ

へし合ふ程、多くなつて參りました。それを見た惠印の情けなさは、大概前からの行きかかりでも、御推察が參るでございませう。が、ここに妙な事が起つたと申しますのは、どう云ふものか、惠印の心にもほんとうに龍が昇りさうな――それも始はどちらかと申すと、昇らない事もなささうな氣がし出した事でございます。惠印は元よりあの高札を打つた當人でございますから、そんな莫迦げた氣のすることはありさうもないものでございますが、目の下で寄せつ返しつしてゐる烏帽子の波を見て居りますと、どうもそんな大變が起りさうな氣が致してなりません。これは見物の人數の心もちが何時となく鼻藏にも乘り移つたのでございませうか。それともあの建札を建てたばかりに、こんな騷ぎが始まつたと思ふと、何となく氣が咎めるので、知らず知らずほんとうに龍が昇つてくれれば好いと念じ出したのでございませうか。その邊の事情は兎も角も、あの高札の文句を書いたものは自分だと重々承知しながら、それでも惠印は次第次第に情けない氣もちが薄くなつて、自分も叔母

の尼と同じやうに飽かず池の面を眺め始めました。又成程さう云ふ氣が起りでも致しませんでしたら、昇る氣づかひのない龍を待つて、如何に不承々々とは申すものの、南大門の下に小一日も立つて居る譯には參りますまい。

「けれども猿澤の池は前の通り、漣も立てずに春の日ざしを照り返して居るばかりでございます。空もやはりほがらかに晴れ渡つて、拳程の雲の影さへ漂つて居る容子はございません。が、見物は相不變、日傘の陰にも、平張の下にも、或は又棧敷の欄干の後にも、簇々と重なつて、朝から午へ、午から夕へ日影が移るのも忘れたやうに、龍王が姿を現すのを今か今かと待つて居りました。

「すると惠印がそこへ來てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のやうな一すぢの雲が中空にたなびいたと思ひますと、見る間にそれが大きくなつて、今までのどかに晴れてゐた空が、俄にうす暗く變りました。その途端に一陣の風がさつと、猿澤の池に落ちて、鏡のやうに見えた水の面に無數の波を描きましたが、さ

すがに覺悟はしてゐながら慌てまどつた見物が、あれよあれよと申す間もなく、天を傾けてまつ白にどつと雨が降り出したではございませんか。のみならず神鳴も急に凄じく鳴りはためいて、絶えず稲妻が梭のやうに飛びちがふのでございます。それが一度鍵の手群る雲を引つ裂いて、餘る勢に池の水を柱の如く捲き起したやうでございましたが、惠印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色の爪を閃かせて一文字に空へ昇つて行く十丈あまりの黑龍が、朦朧として映りました。が、それは瞬く暇で、後は唯風雨の中に、池をめぐつた櫻の花がまつ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でございます——度を失つた見物が右往左往に逃げ惑つて、池にも劣らない人波を稲妻の下で打たせた事は、今更別にくだくだしく申し上げるまでもございますまい。

さてその内に豪雨もやんで、青空が雲間に見え出しますと、惠印は鼻の大きいのも忘れたやうな顔色で、きよろきよろあたりを見廻しました。一體今見た龍の姿は

眼のせいではなかつたらうか――さう思ふと、自分が高札を打つた當人だけに、どうも龍の天上するなどと申す事は、なささうな氣も致して參ります。と申して、見た事は確に見たのでございますから、考へれば考へる程益々不審でたまりません。そこで側の柱の下に死んだやうになつて坐つてゐた叔母の尼を抱き起しますと、妙にてれた容子も隱しきれないで、「龍を御覽じられたかな」と臆病らしく尋ねました。すると叔母も大息をついて、暫く口もきけないのか、唯何度となく恐しさうに頷くばかりでございましたが、やがてまた震へ聲で、「見たともの、見たともの、金色の爪ばかり閃かいた、一面にまつ黑な龍神ぢやろが」と答へるのでございます。して見ますと龍を見たのは、何も鼻藏人の得業惠印の眼のせいばかりではなかつたのでございませう。いや、後で世間の評判を聞きますと、その日そこに居合せた老若男女は、大抵皆雲の中に黑龍の天へ昇る姿を見たと申す事でございました。

「その後惠印は何かの拍子に、實はあの建札は自分の惡戯だつたと申す事を白狀し

てしまひましたが、惠門を始め仲間の法師は一人もその白狀をほんとうとは思はなかつたさうでございます。これで一體あの建札の惡戯は圖星に中つたのでございませうか。それとも的を外れたのでございませうか。鼻藏の、鼻藏人の、大鼻の藏人得業の惠印法師に尋ねましても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違ございますまい……」

三

宇治大納言隆國、「成程之は面妖な話ぢや。昔はあの猿澤池にも、龍が棲んで居つたと見えるな。何、昔もゐたかどうか分らぬ。いや、昔は棲んで居つたに相違あるまい。昔は天が下の人間も皆心から水底には、龍が住むと思うて居つた。さすれば龍もをのづから天地の間に飛行して、神の如く折々は不思議な姿を現した筈ぢや。が、予に談議を致させるよりは、その方どもの話を聞かせてくれい。次は行脚の法

師の番ぢやな。

「何、その方の物語は、池の尾の禪智内供とか申す鼻の長い法師の事ぢや？　これは又鼻藏の後だけに、一段と面白からう。では早速話してくれい。――」

首が落ちた話

上

何小二は軍刀を抛り出すと、夢中で馬の頸にしがみついた。確かに頸を斬られたと思ふ――いや、これはしがみついた後で、さう思つたのかも知れない。唯、何か頸へずんと音を立てゝ、はいつたと思ふ――それと同時に、しがみついたのである。すると馬も創を受けたのであらう。何小二が鞍の前輪へつつぷすか早いか、一聲高く嘶いて、鼻づらを空へ向けると、忽ち敵味方のごつたになつた中をつきぬけて、滿目の高粱畑をまつしぐらに走り出した。二三發、銃聲が後から響いたやうに思はれるが、それも彼の耳には、夢のやうにしか聞えない。

人の身の丈よりも高い高粱は、無二無三に駈けてゆく馬に踏みしだかれて、波のやうに起伏する。それが右からも左からも、或は彼の辨髪を掃つたり、或は彼の軍服を叩いたり、或は又彼の頸から流れてゐる、どす黑い血を拭つたりした。が、彼の頭には、それを一々意識するだけの餘裕がない。唯、斬られたと云ふ簡單な事實だけが、苦しい程はつきり、腦味噌に焦げついてゐる。斬られた。斬られた。――かう心の中に繰返しながら、彼は全く機械的に、汗みづくになつた馬の腹を何度も靴の踵で蹴つた。

十分程前、何小二は仲間の騎兵と一しよに、味方の陣地から川一つ隔てた、小さな村の方へ偵察に行く途中　黄いろくなりかけた高粱の畑の中で、突然一隊の日本騎兵と遭遇した。それが餘り突然すぎたので、敵も味方も小銃を發射する暇がない。少くとも味方は、赤い筋のはいつた軍帽と、やはり赤い肋骨のある軍服とが見える

と同時に、誰からともなく一度に軍刀をひき拔いて、咄嗟に馬の頭をその方へ立て直した。勿論その時は、萬一自分が殺されるかも知れないなどと云ふことは、誰の頭にもはいつて來ない。そこにあるのは、唯敵である。或は敵を殺す事である。だから彼は馬の頭を立て直すと、いずれも犬のやうに齒をむき出しながら、猛然として日本騎兵のゐる方へ殺到した。すると敵も彼等と同じ衝動に支配されてゐたのであらう。一瞬の後には、やはり齒をむき出した、彼の顏を鏡に映したやうな顏が、幾つも左右に出沒し始めた。さうしてその顏と共に、何本かの軍刀が、忙しく彼等の周圍に、風を切る音を起し始めた。

それから後の事は、どうも時間の觀念が明瞭でない。丈の高い高粱が、まるで暴風雨にでも遇つたやうにゆすぶれたり、そのゆすぶれてゐる穗の先に、銅のやうな太陽が懸つてゐたりした事は、不思議な位はつきりと覺えてゐる。が、その騷ぎがどの位つづいたか、その間にどんな事件がどんな順序で起つたか、かう云ふ點にな

ると、殆何一つはつきりしない。兎に角その間中何小二は自分にもまるで意味を成さない事を、氣違ひのやうな大聲で喚きながら、無暗に軍刀をふりまはしてゐた。一度その軍刀が赤くなつた事もあるやうに思ふがどうも手答へはしなかつたらしい。その中に、ふり廻してゐる軍刀の櫛が、だん〳〵脂汗でぬめつて來る。さうしてそれにつれて、妙に口の中が渴いて來る。そこへ殆眼球がとび出しさうに眼を見開いた、血相の變つてゐる日本騎兵の顏が大きな口を開きながら、突然彼の馬の前に跳り出した。赤い筋のある軍帽が、半ば裂けた間からは、いが栗坊主の頭が覗いてゐる。何小二はそれを見ると、いきなり軍刀をふり上げて、力一ぱいその帽子の上へ斬り下した。が、こつちの軍刀に觸れたのは、相手の軍帽でもなければ、その下にある頭でもない。それを下から刎ね上げた、向うの軍刀の鋼である。その音が爽えくり返るやうな周圍の騷ぎの中に、恐しくかんと冴え渡つて、磨いた鐵の冷かな臭を、一度に鋭く鼻の孔の中へ送りこんだ。さうしてそれと共に、眩く日を反射

した、輻の廣い向うの軍刀が、頭の眞上へ來て、くるりと大きな輪を描いた。——と思つた時、何小二の頸のつけ根へは、何とも云へない、つめたい物が、ずんと音を立てゝ、はいつたのである。

馬は、創の痛みで唸つてゐる何小二を乘せた儘、高粱畑の中を無二無三に駈けて行つた。どこまで駈けても、高粱は盡きる容子もなく茂つてゐる。人馬の聲や軍刀の斬り合ふ音は、もう何時の間にか消えてしまつた。日の光も秋は、遼東と日本と變りがない。

繰返して云ふが、何小二は馬の脊に搖られながら、創の痛みで唸つてゐた。が、彼の食ひしばつた齒を洩れる聲には、唯唸り聲と云ふ以上に、もう少し複雜な意味がある。と云ふのは、彼は獨り肉體的の苦痛の爲にのみ、呻吟してゐたのではない。精神的な苦痛の爲に——死の恐怖を中心として、目まぐるしい感情の變化の爲に、

泣き喚いてゐたのである。

彼は永久にこの世界と別れるのが、たまらなく悲しかつた。それから彼をこの世界と別れさせるやうにした、あらゆる人間や事件が恨めしかつた。それからどうしてもこの世界と別れなければならない彼自身が腹立しかつた。それから——こんな種々雜多の感情は、それからそれへと緣を引いて際限なく彼を虐みに來る。だから彼はこれらの感情が往來するのに從つて、「死ぬ。死ぬ。」と叫んで見たり、父や母の名を呼んで見たり、或は又日本騎兵の惡口を云つて見たりした。が、不幸にしてそれが一度彼の口を出ると、何の意味も持つてゐない、嗄れた唸り聲に變つてしまう。それほどもう彼は弱つてでもゐたのであらう。

「私ほどの不幸な人間はない。この若さにこんな所まで戰に來て、しかも犬のやうに譯もなく殺されてしまう。それには第一に、私を斬つた日本人が憎い。その次に私たちを偵察に出した、私の隊の上官が憎い。最後にこんな戰爭を始めた、日本

國と清國とが憎い。いや憎いものはまだ外にもある。私を兵卒にした事情に幾分でも關係のある人間が、皆私には敵と變りがない。私はさう云ふいろ〳〵の人間のおかげで、したい事の澤山あるこの世の中と、今の今別れてしまふ。あゝ、さう云ふ人間や事情のするなりにさせて置いた私は、何と云ふ莫迦だらう。」

何小二はその唸り聲の中にこんな意味を含めながら、馬の平首にかぢりついて、何處までも高粱の中を走つて行つた。その勢に驚いて、時々鶉の群が慌しくそこここから飛ひ立つたが、馬は元よりそんな事には頓着しない。脊中に乘せてゐる主人が、時々ずり落ちさうになるにもかまはずに、泡を吐き〳〵駈けつゞけてゐる。

だからもし運命が許したら、何小二はこの不斷の呻吟の中に、自分の不幸を上天に訴へながら、あの銅のやうな太陽が西の空に傾くまで、日一日馬の上でゆられ通したのに相違ない。が、この平地が次第に緩い斜面をつくつて、高粱と高粱との間を流れてゐる、輻の狹い濁り川が、行手に明く開けた時、運命は二三本の川楊の木

になつて、もう落ちかゝつた葉を低い梢に集めながら、嚴しく川のふちに立つてゐた。さうして、何小二の馬がその間を通り拔けるが早いか、いきなりその茂つた枝の中に、彼の體を抱き上げて、水際の柔な泥の上へまつさかさまに拋り出した。

その途端に何小二は、どうか云ふ聯想の關係で、空に燃えてゐる鮮な黃いろい炎が眼に見えた。子供の時に彼の家の厨房で、大きな竈の下に燃えてゐるのを見た、鮮な黃いろい炎である。「あゝ火が燃えてゐる」と思ふ——その次の瞬間には彼はもう何時か正氣を失つてゐた。……

中

馬の上から轉げ落ちた何小二は、全然正氣を失つたのであらうか。成程創の疼みは、何時か殆しなくなつた。が、彼は土と血とにまみれて、人氣のない川のふちに横はりながら、川楊の葉が撫でてゐる、高い蒼空を見上げた覺えがある。その空

は、彼が今まで見たどの空よりも、奥深く蒼く見えた。丁度大きな藍の瓶をさかさまにして、それを下から覗いたやうな氣もちである。しかもその瓶の底には泡の集まつたやうな雲がどこからか生れて來て、又どこかへ偖然と消えてしまふ。それが丁度絶えず動いてゐる川楊の葉に、かき消されて行くやうにも思はれる。

では、何小二は全然正氣を失はずにゐたのであらうか。しかし彼の眼と蒼空との間には實際そこになかつた色々な物が、影のやうに幾つとなく去來した。第一に現はれたのは、彼の母親のうすよごれた裙子である。子供の時の彼は、嬉しい時でも、悲しい時でも、何度この裙子にすがつたかわからない。が、これは思はず彼が手を伸して、促へやうとする間もなく、眼界から消えてしまつた。消える時に見ると、裙子は紗のやうに薄くなつて、その向うにある雲の塊を、雲母のやうに透かせてゐる。

その後からは、彼の生まれた家の後にある、だだつ廣い胡麻畑が、辷るやうに流

れて來た。さびしい花が日の暮を待つやうに咲いてゐる、眞夏の胡麻畑である。何小二はその胡麻の中に立つてゐる、自分や兄弟たちの姿を探して見た。が、そこに人らしいもの丶影は一つもない。唯色の薄い花と葉とが、ひつそりと一つになつて、薄い日の光に浴してゐる。これは空間を斜に横ぎつて、吊り上げられたやうにすつと消えた。

するとその次には妙なものが空をのたくつて來た。よく見ると、燈夜に街をかついで歩く、あの大きな龍燈である。長さは凡そ四五間もあらうか。竹で造つた骨組みの上へ紙を張つて、それに青と赤との畫の具で、華やかな彩色が施してある。形は畫で見る龍と、少しも變りがない。それが畫間だのに、中へ蠟燭らしい火をともして、彷彿と蒼空へ現はれた。その上不思議な事には、其の龍燈が、どうも生きてゐるやうな氣もちがする、現に長い鬚などは、ひとりで左右へ動くらしい。——と思ふ中にそれもだん〳〵視野の外へ泳いで行つて、そこから急に消えてしまつ

た。

それが見えなくなると、今度は華奢な女の足が突然空へ現れた。纏足をした足だから、細さは漸く三寸あまりしかない。しなやかにまがつた指の先には、うす白い爪が柔く肉の色を隔てゝゐる。小二の心にはその足を見た時の記憶が夢の中で食はれた蚤のやうに、ぼんやり遠い悲しさを運んで來た。もう一度あの足にさはる事が出來たなら、――しかしそれは勿論もう出來ないのに相違ない。こゝとあの足を見た所との間は、何百里と云ふ道程がある。さう思つてゐる中に、足は見る〳〵透明になつて、自然と雲の影に吸はれてしまつた。

その足が消えた時である。何小二は心の底から、今までに一度も感じた事のない、不思議な寂しさに襲はれた。彼の頭の上には、大きな蒼空が音もなく蔽ひかかつてゐる。人間はいやでもこの空の下で、そこから落ちて來る風に吹かれながら、みじめな生存を續けて行かなければならない。これは何と云ふ寂しさであらう。さうしてその寂しさを今まで自分が知らなかつたと云ふ事は、何と云ふ又不思議な事であらう。何小二は思はず長いため息をついた。

この時、彼の眼と空との中には、赤い筋のあゝ軍帽をかぶつた日本騎兵の一隊が、今までのどれよりも早い速力で、慌しく進んで來た。さうして又同じやうな速力で、慌しくどこかへ消えてしまつた。ああ、あの騎兵たちも、寂しさはやはり自分と變らないであらう。もし彼等が幻でなかつたなら、自分は彼等と互に慰め合つて、せめて一時でもこの寂しさを忘れたい。しかしそれはもう、今になつては遲かつた。

何小二の眼には、とめどもなく涙があふれて來た。その涙に濡れた眼でふり返つた時、彼の今までの生活が、如何に醜いものに滿ちてゐたか、それは今更云ふ必要はない。彼は誰にでも謝りたかつた。さうして又、誰をでも赦したかつた。

「もし私がこゝで助かつたら、私はどんな事をしても、この過去を償ふのだが。」

彼は泣きながら、心の底でかう呟いた。が、限りなく深い、限りなく蒼い空は、

まるでそれが耳へはいらないやうに、一尺づつ或は一寸づつ、徐々として彼の胸の上へ下つて來る。その蒼い顱氣の中に、點々としてかすかにきらめくものは、大方晝見える星であらう。もう今はあの影のやうなものも、二度と眸底は横ぎらない。何小二はもう一度歎息して、それから急に脣をふるはせて、最後にだん〴〵眼をつぶつて行つた。

下

日清兩國の間の和が講ぜられてから、一年ばかりたつた、或早春の午前である。北京にある日本公使館内の一室では、公使館附武官の木村陸軍少佐と、折から官命で内地から視察に來た農商務省技師の山川理學士とが、一つテエブルを圍みながら、一碗の珈琲と一本の葉卷とに忙しさを忘れて、のどかな雜談に耽つてゐた。早春とは云ひながら、大きなカミンに火が焚いてあるので、室の中はどうかすると汗がにじむ程暖い。そこへテエブルの上へのせた鉢植えの紅梅が時々支那めいた匂を送つて來る。

二人の間の話題は、暫らく西太后で持ち切つてゐたが、やがてそれが一轉して日清戰爭當時の追憶になると、木村少佐は何を思つたか急に立ち上つて、室の隅に置いてあつた神州日報の綴ぢこみを、こつちのテエブルへ持つて來た。そうして、その中の一枚を山川技師の眼の前へひろげると、指で或箇所をさしながら、讀み給へと云ふ眼つきをした。それがあまり唐突だつたので、技師はちよいと驚いたが、相手の少佐が軍人に似合はない、洒脫な人間だと云ふ事は、日頃からよく心得てゐる。そこで咄嗟に、戰爭に關係した奇拔な逸話を豫想しながら、その紙面へ眼をやると、果してそこには、日本の新聞口調に直すとこんな記事が、四角な字ばかりで物々しく掲げてあつた。

——街の剃頭店主人、何小二なる者は、日清戰爭に出征して、屢々勳功を顯した

る勇士なれど、凱に後兎角素行修らず、酒と女とに身を持崩してゐたが、去る一日、某酒樓にて飲み仲間の誰彼と口論し、遂に掴み合ひの喧嘩となりたる末、頸部に重傷を負ひ即刻絶命したり、ことに不思議なるは同人の頸部なる創にして、こはその際兇器にて傷けられたるものにあらず、全く日清戰爭中戰場にて負ひたる創口が、再破れたるものにして、實見者の談によれば、格闘中同人が卓子と共に顚倒するや否や、首は俄然喉の皮一枚を殘して、鮮血と共に床上に轉び落ちたりと云ふ。但當局はその眞相を疑ひ、目下犯人嚴探中の由なれども、諸城の某甲が首の落ちたる事は、載せて聊齋志異にもあれば、該何小二の如きも、その事なしとは云ふ可からざるか。云々。

山川技師は讀み了ると共に、呆れた顏をして、「何だい、これは」と云つた。すると木村少佐は、ゆつくり葉卷の煙を吐きながら、鷹揚に微笑して、

「面白いだらう。こんな事は支那でなくつては、ありはしない。」

「さうどこにでもあつて、たまるものか。」

山川技師もにや〳〵しながら、長くなつた葉卷の灰を灰皿の中へはたき落した。

「しかも更に面白い事は——」

少佐は妙に眞面目な顏をして、ちよいと語を切つた。

「僕はその何小二と云ふやつを知つてゐるのだ。」

「知つてゐる？　これは驚いた。まさかアツタツシエの癖に、新聞記者と一しよになつて、い〻加減な嘘を揑造するのであるまいね。」

「誰がそんなくだらない事をするものか。僕はあの頃——屯の戰で負傷した時に、その何小二と云ふやつも、やはり我軍の野戰病院へ收容されてゐたので、支那語の稽古かた〴〵二三度話しをした事があるのだ。頸に創があると云ふのだから、十中八九あの男に違ひない。何でも偵察か何かに出た所が、我軍の騎兵と衝突して頸へ一つ日本刀をお見舞申されたと云つてゐた。」

「へえ、妙な縁だね。だがそいつはこの新聞で見ると、無頼漢だと書いてあるではないか。そんなやつは一層その時に死んでしまつた方が、どの位世間でも助かつたか知れないだらう。」

「それがあの頃は、極正直な、人の好い人間で、捕虜の中にも、あんな柔順なやつは珍らしい位だつたのだ。だから軍醫官でも何でも、妙にあいつを可愛いかつたと見えて、特別によく療治をしてやつたらしい。あいつは又身の上話をしても、中中面白い事を云つてゐた。殊にあいつが頸に重傷を負つて、馬から落ちた時の心もちを僕に話して聞かたのは、今でもちやんと覺えてゐる。或川のふちの泥の中にころがりながら、川楊の木の空を見てゐると、母親の裙子だの、女の素足だの、花の咲いた胡麻畑だのが、はつきりその空へ見えたと云ふのだが。」

木村少佐は葉卷を捨てゝ、珈琲茶碗を脣へあてながら、テエブルの上の紅梅へ眼をやつて、獨り語のやうに語を次いだ。

「あいつはそれを見た時に、しみ〴〵今までの自分の生活が淺ましくなつて來たと云つてゐたつけ。」

「それが戰爭がすむと、すぐに無頼漢になつたのか。だから人間はあてにならない。」

山川技師は綺子の脊へ頭をつけながら、足をのばして、皮肉に葉卷の煙を天井へ叫いた。

「あてにならないといふのは、あいつが猫をかぶつてゐたと云ふ意味か。」

「さうさ。」

「いや、僕はさう思はない。少くともあの時は、あいつも眞面目にさう感じてゐたのだらうと思ふ。恐らくは今度も亦、首が落ちると同時に（新聞の語をその儘使へば）やはりさう感じたらう。僕はそれをこんな風に想像する。あいつは喧嘩をしてゐる中に、醉つてゐたから、譯なく卓子と一しよに抛り出された。さうしてその拍子に、創口が開いて、長い辮髪をぶらさげた首が、ごろりと床の上へころげ落ちた。

あいつが前に見た母親の裙子とか、女の素足とか、或は又花のさいてゐる胡麻畑とか云ふものは、やはりそれと同時にあいつの眼の前を、彷彿として往來して事だらう。或は屋根があるにも關らず、あいつは深い蒼空を、遙か向うに望んだかも知れない。あいつはその時、しみ〴〵又今までの自分の生活が淺ましくなつた。が、今度はもう間に合はない。前には正氣を失つてゐる所を、日本の看護卒が見つけて介抱してやつた。今は喧嘩の相手が、そこをつけこんで打つたり蹴つたりする。そこであいつは後悔した上にも後悔をしながら息をひきとつてしまつたのだ。」

山川技師は肩をゆすつて笑つた。

「君は立派な空想家だ。だが、それならどうしてあいつは、一度さう云ふ目に遇ひながら、無賴漢なんぞになつたのだらう。」

「それは君の云ふのとちがつた意味で、人間はあてにならないからだ。」

木村少佐は新しい葉卷きに火をつけてから、殆得意に近い程晴々した調子で、微

笑しながらかう云つた。

「我々は我々自身のあてにならない事を、痛切に知つて置く必要がある。實際それを知つてゐるもののみが、幾分でもあてになるのだ。さうしないと、何小二の首が落ちたやうに、我々の人格も、何時どんな時首が落ちるかもわからない。――すべて支那の新聞と云ふものは、こんな風に讀まなくてはいけないのだ。」

蜜柑と沼地

蜜柑

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに、吠え立てゐた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には云ひ樣のない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへぢつと兩手をつつこんだ儘、そこにはいつてゐる夕刊を出して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずゐずゐと後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。所がそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて來た。と同時に一つづしりと搖れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラットフォオムの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに視儀の禮を云つてゐる赤帽——さう云ふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心もちになつて、卷煙草に火をつけながら、始めて懶い眸をあげて、前の席に腰を下してゐた小娘の顏を一瞥した。

それは油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある皺だらけの兩頰を氣持の惡い程赤く火照らせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも垢

じみた萠黄色の毛絲の襟巻がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜燒けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから卷煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心もちもあつて、今度はポツケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。すると其時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電燈の光に變つて、刷の惡い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで來た。云までもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は餘りに平凡な出來事ばかりで持ち切つてゐた。講和問題　新婦新郎、瀆職事件、死亡廣告――私は隧道へはいつた一瞬間、汽車の走つてゐる方向が逆に

なつたやうな錯覺を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、恰も卑俗な現實を人間にしたやうな面持ちで、私の前に坐つてゐる事を絶えず意識せずにはゐられなかつた。この隧道の中の汽車と、この田舍者の小娘と、さうして又この平凡な記事に埋つてゐる夕刊と、――これが象徴でなくて何であらう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であらう。私が一切がくだらなくなつて、讀みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を靠せながら、死んだやうに眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心もちがして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうにあがらないらしい。あの皺だらけの頰は愈赤くなつて、時々鼻洟をすすりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはいつて來る。これは勿論私にも、幾分なが

ら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかがらうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明い兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも關らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下さうとする、――その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、單に小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜燒けの手が硝子戸を擡げようとして惡戰苦鬪する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶したやうなどす黑い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顏に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程咳きこまなけれ

ばならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで來なかつたなら、漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切りに通りかかつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すぼらしい藥屋恨や瓦屋根がごみごみと狹苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ――その時その蕭索とした踏切の柵の向うに、私は頰の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめら

れたかと思ふ程、揃つて脊が低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を擧げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乘り出してゐた例の娘が、あの霜燒けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懷に藏してゐる幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに來た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帶びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに聲を擧げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇も

なく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が燒きつけられた。さうしてそこから、或得體の知れない朗な心もちが湧き上つて來るのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返つて、相不變皺だらけの頰を萠黃色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。

……

私はこの時始めて、云ひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出來たのである。

沼地

或雨の降る日の午後であつた。私は或繪畫展覽會場の一室で、小さな油繪を一枚發見した。發見――と云ふと大袈裟だが、實際さう云つても差支へない程、この畫だけは思ひ切つて採光の惡い片隅に、それも恐しく貧弱な緣へはいつて、忘れられたやうに懸かつてゐたのである。畫は確、「沼地」とか云ふので、畫家は知名の人でも何でもなかつた。又畫そのものも、唯濁つた水と、濕つた土と、さうしてその土に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋常の見物からは、文字通り一顧さへも受けなかつた事であらう。

その上不思議な事にこの畫家は、萎黃たる草木を描きながら、一刷毛も緣の色を

使つてゐない。蘆や白楊や無色果を彩るものは、どこを見ても濁つた黃色である。まるで濡れた壁土のやうな、重苦しい黃色である。この畫家には草木の色が實際さう見えたのであらうか。それとも別に好む所があつて、故意こんな誇張を加へたのであらうか。――私はこの畫の前に立つて、それから受ける感じを味ふと共に、かう云ふ疑問も亦挾まずにはゐられなかつたのである。

しかしその畫の中に恐しい力が潛んでゐる事は、見てゐるに從つて分つて來た。殊に前景の土の如きは、そこを踏む時の足の心もちまでもまざまざと感じさせる程、それ程的確に描いてあつた。踏むとぶすりと音をさせて踝が隱れるやうな、滑な淤泥の心もちである。私はこの小さな油畫の中に、鋭く自然を摑まうとしてゐる、傷しい藝術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた藝術品から受ける樣に、この黃いろい沼地の草木からも恍惚たる悲壯の感激を受けた。實際同じ會場に懸かつてゐる大小さまざまな畫の中で、この一枚に拮抗し得る程力强い畫は、どこにも見出

す事が出來なかつたのである。

「大へんに感心してゐますね。」

かう云ふ言と共に肩を叩かれた私は、恰も何かが心から振ひ落されたやうな氣もちがして、卒然と後をふり返つた。

「どうです、これは。」

相手は無頓着にかう云ひながら、剃刀を當てたばかりの顎で、沼地の畫をさし示した。流行の茶の脊廣を着た、恰幅の好い、消息通を以て自ら任じてゐる、――新聞の美術記者である。私はこの記者から前にも一二度不快な印象を受けた覺えがあるので、不承々々に返事をした。

「傑作です。」

「傑作――ですか。これは面白い。」

記者は腹を搖つて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。近くで畫を見てゐた二三人の見物が皆云ひ合せたやうにこちらを見た。私は愈々不快になつた。

「これは面白い。元來この畫はね、會員の畫ぢやないのです。が、何しろ當人が口癖のやうにここへ出す出すと云つてゐたものですから、遺族が審査員へ賴んで、やつとのこの隅へ懸ける事になつたのです。」

「遺族？　ぢやこの畫を描いた人は死んでゐるのですか。」

「死んでゐるのです。尤も生きてゐる中から、死んだやうなものでしたが。」

私の好奇心は何時か私の不快な感情より強くなつてゐた。

「どうして？」

「この畫描きは餘程前から氣が違つてゐたのです。」

「この畫を描いた時もですか。」

「勿論です。氣違ひででもなければ、誰がこんな色の畫を描くものですか。それをあなたは傑作だと云つて感心してお出でなさる。そこが大に面白いですね。」

記者は又得意さうに、聲を揚げて笑つた。彼は私が私の不明を恥ぢるだらうと豫測してゐたのであらう。或は一歩進めて、鑑賞上に於ける彼自身の優越を私に印象させようと思つてゐたのかも知れない。しかし彼の期待は二つとも無駄になつた。彼の話を聞くと共に、殆嚴肅にも近い感情が私の全精神に云ひやうのない波動を與へたからである。私は悚然として再びこの沼地の畫を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴァスの中に、恐しい焦燥と不安とに虐まれてゐる傷しい藝術家の姿を見出した。

「尤も畫が思ふやうに描けないと云ふので、氣が違つたらしいのですがね。その點だけはまあ買へば買つてやれるのです。」

記者は晴々した顔をして、殆嬉しさうに微笑した。これが無名の藝術家が――我々の一人が、その生命を犧牲にして僅に世間から購ひ得た唯一の報酬だつたのである。私は全身に異樣な戰慄を感じて、三度この憂鬱な油畫を覗いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黄土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな凄じい勢で生きてゐる。……

「傑作です。」

私は記者の顔をまともに見つめながら、昂然としてかう繰返した。

大正十年九月二十日印刷
大正十年九月廿五日發行

ヴエストポケツト傑作叢書
第四篇　定價金五拾錢

地獄變

著作權者印

著作者　芥川龍之介
東京市日本橋區通四丁目五十地

發行者　和田利彦
東京市京橋區築地二丁目三十番地

印刷者　川崎佐吉
東京市京橋區築地二丁目三十番地

印刷所　川崎活版所

■圖書目錄贈呈

發行所　東京市日本橋通四丁目　春陽堂
振替一六一七番
電話下局五十一番

創作書類

菊池寛著	我鬼	定價金貳圓 送料金十二錢
菊池寛著	冷眼	定價金貳圓 送料金十二錢
菊池寛著	極樂	定價金貳圓 送料金十二錢
芥川龍之介著	影燈籠	定價金貳圓 送料金十二錢
芥川龍之介著	鼻	定價金八十錢 送料金六錢
里見弴著	毒蕈	定價二圓五十錢 送料金十二錢
志賀直哉著	荒絹	定價二圓八十錢 送料金十二錢
長與善郎著	或る人々	定價金參圓 送料金十二錢
有島生馬著	死ぬほど	定價壹圓六拾錢 送料金八錢
谷崎潤一郎著	刺青	定價壹圓五拾錢 送料金十二錢

2N-P43

春陽堂發行

終